

長  
周  
叢  
書

[162]

吉  
田  
物  
語  
下

5  
17  
1



長周叢書

吉田物語 下

吉田物語附尾上卷

公方義昭卿織田信長御半不和之事



公方義昭卿織田信長を御頼被成に付御敵を退治し公方に被備候へ  
共武將の器にあたり不給候に付十七箇條の諫言を書立御異見被申  
候へは御承引不被遊卻て御遺恨に被思召候就夫信長も何事によら  
ず公儀へ伺も無之自分所存のまゝに被申付候故彌御中不和に成給  
ひ甲州武田信玄江州淺井備前守越前の朝倉を御頼み被成候其後信  
玄は遠州へ出馬せられ淺井朝倉は江州へ働き候由被聞召信長事東  
西に敵を請候此弊に乗て御打果し可被成と被思召候信長此段を聞  
れ島田所助村井長門守日乘上人を以て御理り被申上候へ共且以て  
不被聞召分江州瀬田の光淨院磯貝新右衛門以下に被仰付石山堅田  
に兩城を被構候信長よりは柴田勝家明智日向守丹羽五郎左衛門蜂

屋兵庫助を被差向候此四人先石山に押寄せ候處に城兵降參仕候に付堅田の城へ取掛即時攻破り打取首數三百餘級岐阜へ送り候其以後天正元年の三月に信長大軍を卒し上京の刻大津に陣取れ候へは細川兵部大輔藤孝荒木信濃守罷出候へは京都の様子委細に問被申義昭御味方の者はたれと尋ねられその上京都へ押入たまふ處に義昭御降參の御詫言に候信長も分別被仕同四月に岐阜へ歸陣候時丹羽長秀を招き信長被申付候は義昭又頓て逆意可有之候義昭をおしはらひ我等天下の仕置可仕候其方は在所へ歸り大船十餘艘造らせ可相待候通被申渡候信長積りの如く同年七月に義昭又信長に逆意被成日野大納言高倉宰相伊勢伊勢守三淵大和守に二條の御所を守らせ御自分には宇治の槇の島の城へ籠りたまふ信長此様子を聞給ひ大兵を引卒し岐阜へ出馬有て佐保山に著陣し丹羽長秀に

被申付候大船に乗坂本に赴き京の邊土を放火し其後二條妙覺寺に陣を居へ二條の御所を構れ候へは日野高倉降參の詫言を被申に付て是を赦免し即時槇島へ取掛られ候稻葉伊豫守息右京亮同彦六郎先陣にて大勢押續き宇治川を渡し候時梶川彌三郎と申者諸人に先立て河水を渡す引續きいつれも川を渡し槇島を即時攻破り火を放つ因茲義昭普賢寺へ退きたまふ此折節義昭卿信長御半の儀被聞召御取扱として輝元公よりは林木工允安國寺惠瓊西堂吉川殿よりは井下左衛門小早川殿よりは兼久内藏丞被差越候此衆上著仕佐久間信盛木下藤吉日乗上人に致相對御一命の儀御詫言申上候へは信長被聞召佐久間木下いか様とも計ひ候へと被仰に付御一命無恙同年七月十六日河内國若江の城へ御退出御法體にて昌山公と申候爰に義昭公の御味方に和田伊賀守と申侍攝州に一城を構へ居候に付信

長馬を向られ候時三箇の條目を書て諸士の伺公の席に張せられ候  
其三箇條は和田首を取候者には其賞いか程又侍大將物頭を打取候  
者には其賞いか程城の一番乗迫合の時先掛仕候者には其賞いか程  
可被宛行候間左様に存し候者は其箇條に點をかけ面々の名書仕候  
様にと書付られ候各是を見候ても我こそ御書出の通に可仕と存候  
士無之候處に生國攝州の侍中川瀬兵衛清秀と申者諸人の中を拔出  
和田首と有之箇條に點を掛て姓名を記す各是を見て如何可有之哉  
と申わへり清秀は急き宿所に歸りて支度を調へ敵城に赴き候時清  
秀の妻女海老を吸物にして盃を出され候海老は跡へ退く時早き物  
なるに依てなり於于今中川の家には祝儀の時海老の吸物と承及候  
瀬兵衛事内々和田は自身城邊の夜廻り仕候とは聞及ひけれ共男ふ  
りを不知候處に清秀常に軍神を祈念仕候印にや山伏一人風と來り

候に付清秀尋候は和田伊賀守は何方に居申候哉山伏聞て彼所に居  
候と云男ふりはいか様なる哉と問へは委細に物語仕候に付最早打  
取たりと存し城下の川を渡り河岸に柳一村有之候所に待居申候へ  
は案のことく和田馬に乗下人纒召連候て夜廻り仕候得と見すへ和  
田首を一刀に打落し搦て河へ飛込此方の岸へ遊き上り候夜中と云  
川深く候に付下人追掛候儀不相成候故清秀無異儀御本陣へ罷歸り  
和田首を信長備寶檢候へは御感不斜則清秀身上御取立被成候大將  
討れ候に付城抱へ申事不相成即時落去仕候又渡邊宮内と申侍も義  
昭御味方仕り罷居候へ共和田打死仕候に付信長へ降參仕候故義昭  
若江に御滞留不相成和泉の堺へ御越被成夫より紀州へ御退去被遊  
候なり又右に記し申候此御方四人の御使衆信長へ御暇の儀申上候  
處に則御對面被遊候其時西堂申上候は山中鹿之助儀雲伯兩國を望

み申候通風聞御座候於事實は御許容無之様に御次手を以て申上候へど輝元申付候と申候へは信長被聞召毛利三家に對し聊疎意不存候鹿之助いか様に申候共且以同心仕間敷候某は東國をおさめ凶徒退治可仕候毛利三家の衆は西地を悉く可被攻隨候左候て以後輝元我等別て申合天下の政を改め窮民を救ひ可申候三家の衆も對我等無別心様に和僧能心得可被申と被仰御暇被下一同に罷下候刻安國寺は浮田直家へ爲見舞參候に付元春隆景へ以書狀京都の趣信長行跡委細申上候其狀に曰

一筆申上候京都之儀如形相調今月十二日至備前岡山罷著候尤其表可致參上候へ共長途の儀候間先吉田へ罷下候殊更從信長大事の馬被差下輝元公へ被進候間片時も急申候

一上様御歸洛御操の事我等京著仕候翌日羽柴藤吉郎日乘我等と

□は文  
字不明

□は文  
字不明

被申操候處に上意の事人質能々御取置候はてはと被仰候人質の儀進上申間敷と藤吉は申候夫にて相支り候處に羽柴何と分別候哉左の上意にて底迄無御□候は、一大事の儀候間行方不知見え不申の通信長へは可申候條早々いつ方へも御退被成候て可然の由申候間翌日大坂迄罷歸候我等日乘をば一日跡に残し置候て一往の御異見可申上の由申候條一通り御異見申上候へ共如何にも無御□候間是迄藝州よりも申操り候上意の處強て申上候も如何に候扱此上にて自然西國などへ御下向候ては一大事たるへく候能々御納得承りすへ候て可罷下と申上候へは西國へも唯今の分は儲と御下向有間敷候紀州可有御滯留候條今度退座の御音信仕御返事取候て京都へ罷登り候  
一公方様は上下二十人の内にて小船に召候て紀州宮崎の浦と申

す所へ御忍ひ候信長も唯今討果可申にても無之候間彼所に可有御滞留候先々此國へ御下向なき事をは随分申極候可御心易候

一阿州三好許容有間敷の由朱印相調申候

一但州の儀來二月に羽柴藤吉爲大將亂入の儀定候唯今も半國程は羽柴へ御行候來春御延引候ては不可然候此御分別專一に候一備播作の朱印宗景へ被出候も對藝州進之由殊の外の儀に候一別所宗景の儀も當時持にと定候別所も自身罷出候一つ座に雙方へ被申渡候宗景へ三箇國の朱印御禮從夕庵過分に申掛候おかしく候

一日乘走舞異見昔の周公旦大公望などの様に候似合たる者出たる御事に候雖然仕過され候はて今の分にて候ては藝州御爲重

寶今度の調も悉皆彼仁馳走にて候唯あふなく存候く藤吉などの取成迄日乘にて候是にて可有御推量候

一若君様遣なりけに候信長宿に置被申候來春は御禮御申候て可然の由但過分の御禮信長若君へも申通候御推量よりも此下切て不見の行はやく可被申付候國も則可相果候是も箇條に被載候何と書候とも許容有間敷候由に候

一山中鹿之助柴田に付候て種々申候是又耽と許容有間敷候由朱印出候

一播州廣瀬の事雜掌付置候間不被仰聞候箇條に載候て披露仕是は放狀調申候左候條今日十二日直家面談仕來春先廣瀬へ被取懸候と申事に候内々直家も其望候條彼表へ可罷向と令約諾候被仰聞候條々多分此通かど存候今度信長機嫌一段能く上下に

て少々緩怠人も候は、按合則可申付候由に候今度宗景の使者  
同道仕候藤吉一段の被申様にて候彼使も大汗をかき申候頭に  
大やいとうすへたる様に候て目出候左候條其口狀御無用の由  
不捨御申候て無御無音存との信長直に被申事に候  
一今度三好左京大夫内衆成易腹を切候代々如此と申候かさりと  
てはの腹を切候と申候

一河内高屋の城由佐と四國衆籠候相城被取付候其人數打入候へ  
は信長も歸國の由に候定て可爲此月候

一信長の代五年三年は可被持候來年あたりは公家などに可被成  
と見及候左候て後高ころひにあふのけにころはれ候すると見  
申候藤吉さりとてはの者にて候面上の節一二に可申上候明十  
三日吉田へ被下候吉田可致言上候此由宜預御披露候恐惶謹言

安國寺

十二月十二日

惠瓊判

山縣筑前守殿

井上又右衛門殿

義昭卿備後鞆御下向之事

一大納言義昭卿紀州宮崎に御滞留被遊候へ共御頼被成方無之候ては  
可被遂御本意儀不被爲成に付一色式部太輔飯川肥後守等御供にて  
御船に召され播州へ御座被成浮田直家方へ御使者を以て御身上の  
儀御頼被成候へ共領掌不仕に付夫より備後鞆へ御下被成此御方へ  
御使者被差越輝元公兩川殿無餘儀御頼み被遊候御三殿御一所にて  
御一門御家老衆悉く被召出いか、共御請可被遊候哉と御談合の時  
各被申上候は御領掌の御請被仰上候時は信長とは御手切に相極り



候左候は、向後の儀如何可有御座哉と申上候又御意に如右公方御  
没落候て無餘儀御頼候を被仰切候事も難被爲成思召候以來世上の  
となへも有之時は御弓箭の疵にも可成候間御領掌の御請可被遊と  
被仰御請被仰上候其後鞆より一里程後に山田と云在所候此所に横  
山修理と申地侍罷居候此屋敷被召上候て御所の御普請被仰付成就  
候て御移り被遊候桂左衛門大夫事同國神邊に居城仕候に付都合を  
御預被成候信長へは御使者にて義昭卿備後へ御下向候て色々御頼  
被成候に付先御滞留候様に申上候と被仰遣候就夫御手切に成申候  
其後秀吉と御和平に成り義昭御念願も不相叶京都へ御上り被成室  
町に御住居被遊候尤御在京諸事の御物入御普請なども大半此御方  
より被仰付被進之由に候ある時秀吉公より公方の號御所望被成候  
被差上候へは一廉御知行可被遣との儀に候へ共愚將にてかの故不

入御吟味にて不被差上候故秀吉公菊亭殿御談合被遊候て關白にな  
らせられ候其節の儀に候哉此御方聚樂の御屋敷へ秀吉公御成の時  
義昭卿しらすへ御出候て御座被成候へは御手を出され候て公方公  
方と被成御意の由に候終に室町の御所にて行年六十一歳の時薨去  
被遊候靈陽院殿と申候尊氏卿の御血脈於爰斷絶仕候事

吉川殿御父子因州御出馬之事

一但馬國の住人山名入道宗仙事尼子勝久に一味仕り因州の守護山名  
大藏太輔を尼子方へ引入申候光年も勝久雲州亂入の時に奈佐日本  
之助を頼み賊船を催し勝久を此船に乗せて雲州島根の郡へ下し候  
元春御計策にて大藏太輔事又御味方に招き給ひ天正元年の七月元  
春御父子七千餘の御人數を被召連雲州富田を御出馬有て伯州八橋  
に著たまひ夫より因幡の國へ打入但州表の様體を被聞召同年の十

月因州笹尾に御陣をとられ但州へ可有御發向に御儀定候處に山名宗仙降参仕り垣屋大田垣いつれも人質を指出し候山名豊國も幼年の子に大田垣勘七と云者を相添差越候家來山口森下中村鹽冶奈佐日本之助佐々木三郎左衛門等一同に子供を質として進上申に付一戰に不及因但兩國治り候に付元春御父子同年極月下旬因州を引はらい正月三日富田へ御歸陣候事

山中鹿之助大坪甚兵衛合戦之事

一尼子勝久を大將に仕立山中鹿之助立原源太兵衛神西三郎左衛門森脇東市正横道源介同權之允牛尾大炊助同二郎右衛門足立次郎左衛門同治兵衛進左吉兵衛以下供仕り天正元年十二月但州へ下り因幡へ可働とて其催し仕候へとも其頃元春笹尾に御在陣の通承り忍て罷居御歸陣を聞山名但馬守を頼み因州へ打入何とぞ仕伯州を切取

雲州へ發向可仕と企候然處に山名大藏方より鹿之助迄使を以申候は我等事毛利家へ人質を出し置候故唯今色を替申儀難成候曾て別心不存候兵糧等御用に御座候は、可被仰越の通申に付勝久大に悦ひ天正二年正月因州へ打入此御方一味の衆抱の城三箇所攻落候爰に大坪神兵衛は御當家へ無二御味方申に付元就公御代より牛尾大藏左衛門を爲加勢被差添置候鹿之助など談合に先つ神兵衛居城を攻取可申とて其催し仕候折節甚兵衛事纔の人数召連年始の爲御祝儀藝州へ罷下候鹿之助此段承り願ふ所也とて其勢一千計にて鳥取の近所雁金山の麓に待掛居候神兵衛は此儀夢にも不存行かゝり鹿之助を見付たかひに睨み合言葉戰など仕候素より甚兵衛は勇氣勝れたる武士なるに依て堪かねて突てかゝる鹿之助は多勢と云しかも山のかさに罷居候へ共突立られ後の林の中へ逃入候へは甚兵衛

高聲に人に逢て林中へ逃入は誠に名にあふ鹿之助なりと突て藝州へ罷下候也

因州私部合戦并大坪武田合戦之事

一天正二年の春山中鹿之助立原源太兵衛其外伯州の諸浪人一千餘にて私部の城へ押寄せ候大坪家老姫路玄蕃牛尾大藏左衛門一命を捨防戦仕候へ共寄手多勢に付無是非三之曲輪を取られ候故本城へ引入相戦候城の者共甚兵衛留守に候故一入手強に働申に付寄手攻屈し終に引拂ひ退散仕候城兵も城を攻落されざるを勝に仕付送候事も不仕彌堅固に城を相守候然處に同年三月十日武田源三郎龜井新十郎七百餘の人數にて麓の城を出小松原に陣を取近邊の民屋を放火する大坪甚兵衛事藝州より罷歸り三百餘の人數を召連鹿野へ可働と存罷出候處に武田龜井に行逢則突て掛る數刻相戦ひ終に龜井

新十郎武田源三郎を追散し勝利を得て私部の城へ罷歸候事

因州鳥取合戦之事

一同年九月廿二日山中鹿之助立原源太兵衛牛尾大炊助森脇市正横道源介同權之丞足立次郎左衛門同治兵衛等三千五百の人數にて毛利入道淨意籠り居候鳥執の城へ押懸既に天王の尾迄攻上り候城兵三百餘人切て出防戦仕候へ共敵多勢故不相叶扱に仕り城を明渡し候に付則勝久入替り居城候處に山名豊國方より使を以て申候は鳥取の城の儀元來拙者抱の端城に候條此方へ御渡可被成候無御分別候は、彌毛利家へ降り一戦可仕と申掛候勝久被聞豊國申分ちと過分なる事なから此節の儀なれば先望にまかすへきとて本丸を豊國に渡し自分には二之曲輪に被居候其後大坪神兵衛豊國へ諫めけるは兎角毛利家へ御一味被成可然と再三に及申けれ共承引不仕に付拙

者は毛利家へ可參と申て藝州へ罷下候故豊國大に立腹にて甚兵衛子共兩人爲人質出し置候を見懲しの爲に鳥取の山下に張付に掛候事

草刈三郎左衛門合戦之事

一天正三年二月五日山中鹿之助大將にて若佐の城を可攻ため鳥取を出馬し若佐近所に陣取候草刈三郎左衛門此由承り一千五百の人数にて鹿之助陣所へ逆よせに寄せ懸候鹿之助方には先陣龜井新十郎武田源三郎八百餘人二陣鹿之助立原源太兵衛一千三百餘人互に懸合相戦ふ草刈方に手柄仕者共多し鹿之助方には横道源助健にて草刈家人高村と云者を突伏首を取高名仕る敵味方戦勞れ勝負不付相引に引退其後鹿之助五百計にて打て出て諸所の在家を放火するに付陰山篁部八百餘人召連打て出る山口左馬允七百餘人毛利入道淨

意四百人にて馳加り鹿之助陣取候後の山に陣を取る鹿之助も前後の敵に進退如何共可仕様無之兎角打死と相極め一足も不退前後の敵に懸合せく手強に働候に付陰山篁部毛利山口いづれも退散仕に付鹿之助十死の難を免れて鳥取へ歸候事

勝久鳥取之城被明渡事

一大坪甚兵衛事藝州へ罷下因州表の儀共委細に申上候へ元春被聞召頼て彼地可有御出馬候其内因州荒神山の城乗取可申旨南條元續杉原盛重山田方へ被仰遣候各申談罷出即荒神山を乗崩し山崎十兵衛をは山田出雲守嫡子藏人討取候左候に付山名豊國森下出羽中村對馬守を呼て彌毛利家に背候事如何可有之哉と談合仕候へは各承り大坪も此儀を祐再三諫め申上候毛利家へ早々御一味可然候乍去驗し無御座候ては毛利家のうたかひ可有御座候間鳥取を御攻取候

て是を御土産に被成可然と申に付さらはとて勝久方へ手切の色を見せ候へは勝久大に驚き山名心替りの上は當城の住居成間敷とて大坪甚兵衛明退候私部の城を拵へ龜井新十郎を頭として山名藤四郎横道源介同權之丞森脇市正牛尾大炊助進左吉兵衛以下一千餘人籠置自分には山中鹿之助立原源太兵衛神西加藤を召れ若佐の鬼ヶ城へ被楯籠候處に草刈加賀守景繼若佐表へ働出途一戰勝久の軍兵片寄市正を初として數十人討取其後毎日追合候へ共たかひに勝負は付不申候山中鹿之助申候は草刈兄弟を不討捕剩へ味方を打せ無念に存候彼等兄弟は兎角先勢の中に罷居候間左様被心得打取被申候へと各へ申聞せ色々手立を盡し候へとも終に討候事不相成候然處に山名豐國方より使者を以て元春へ申上候は勝久當國下向候存の外猛勢にて御座候に付某小人数を以て防戰難成存し一旦勝久

に屬し罷居時節を窺ひ此度鳥取の城を追出し候御加勢被差越候は私部鬼か城乗取可申と申に付牛尾大藏左衛門事國方案内者にて候故二百餘の人数を添られ因州へ被遣候牛尾早速鳥取へ著仕先山下の在家に一宿仕候處に鹿之助此様子を聞付五百餘の人数にて夜打を懸候五月七日の夜なれば目をさすもしらぬ程の闇に牛尾能働き無難鹿之助を追はらひ運を開き候事

私部麓合戰

付城主降參之事

一天正三年の秋尼子勝久爲御退治藝州より御人数被差向候一陣吉川駿河守元春同治部少輔元長を大將として御一手衆には熊谷伊豆守信直嫡男兵庫頭隆直天野紀伊守隆重山内新左衛門杉原播摩守盛重南條伯耆入道宗勝嫡男伯耆守元續小嶋官兵衛元清益田越中守藤兼

嫡子右衛門佐元祥佐波越後守秀貫三澤三郎左衛門爲清嫡男攝津守  
爲虎三刀屋彈正左衛門久扶羽根彈正少弼宍道五郎兵衛政慶其外廣  
田櫻井福與利福田牛尾吉田周布都治久利岡本山田香川飯田以下都  
合一萬七千人後陣は小早川隆景を大將として三吉式部少同新兵衛  
同三郎左衛門久代修理亮高野山入道久意嫡男五郎兵衛木梨治部太  
輔元經平賀太郎左衛門小笠原少輔七郎同彈正少弼有地美作守同右  
近古志清左衛門三村紀伊守細川伊勢以下都合二萬餘人同年八月初  
旬藝州を打立て伯州矢走に著陣し給ふ山名豊國此様體を聞て牛尾  
大藏左衛門に向て某事貴殿を遠方より申請終に一戦も不仕候事無  
勇に似たり兩川殿御待設に私部へ働一戦可仕と存候いかゝ可有之  
哉といへば牛尾聞て尤可宜と同意仕同月廿二日其勢一千五百餘に  
て私部の山下へ押寄せ所々に火を放ち柵を破る城兵此様子を見進

左吉兵衛を先として千計鐵砲を打立相戦ふ又城中に残り居候者共  
左の山の尾を廻して來るに付山名方鹽治佐々木山口毛利不相叶引  
退牛尾大藏左衛門同源二郎并家人の金尾藤三等敵數人切伏せ手痛  
く相戦ひ引退なり然は同年九月二日兩川殿鳥取の麓に著給へば山  
名豊國三千餘人を引卒し罷出麓の川に船橋を懸て諸軍を渡し御馳  
走申上候翌三日より私部の城を取巻仕寄を付勢樓を組攻よする爰  
に吉川藏人廣家其頃は又二郎經言と申て十五歳に成たまひ候仕寄  
の番所に出給ひあはれ敵出よかし經言も一鍵すへきと仰候守に付  
居候小坂越中うけ給はり夫は雜兵の分捕と申て一向大將の願ひ給  
ふ事にてはなしと諫めければ經言聞給ひ其方申す所も尤なれ共夫  
は元春元長などの事なり我等は庶子にて手の人數百人とも無之自  
身手を碎く祐名をも取へけれと被仰候其詞のことく或夜城兵夜打

に出候刻雜人に交り鎗取て出給ひ城兵を突立城中へ追込歸らる、也其後晝夜の堺もなく攻詰已に尾くひのから堀一重隔て弓鐵砲稱敷打込に付城中防兼て見ゆる頃は長月半露時雨冬めきて木々の梢もかつ色付錦に不異城兵も寄手も眼をよろこはしめ心を慰めける折節楯の面へ侍一人出て寄手の衆中へ可申入事候間暫く弓鐵砲を止られ候へと申に付定て降參の御詫言にて候哉とて弓鐵砲をとめ鳴を静めければ拙者存寄候に付御眠さまし御一笑の事申候とて山のはや勝色見する時雨哉

と云連歌の發句をそ吟しける元春聞召御床机のあたりを御覽する處に香川兵部罷居候へははや、脇を仕れと被仰に付兵部少不取敢

秋の嵐に落る朝露

と申ければかの男第三を仕り其後表八句互に代り、仕り城中に入候後にさきは森脇市正にてそ有ける又横道權之丞も楯の面へ出て言葉戰など仕候處に今田中書例の太箭打つかひ横道殿請て見給へと云懸ければ權之丞聞て無詮所にて矢を受死候様成戲者にてなく候と云て楯の内へ引入候今田引設たる矢なればきつて放つ處に權之丞かくれ候楯に中り二三寸計裡へ射貫けるとなり其後龜井新十郎一命を御助被下候は、城を明渡可申旨達て御詫言申に付兩川殿被遂御分別城兵を下城させ城を受取せたまふ森脇市正横道權之丞牛尾大炊助は杉原播磨守を頼み罷居其後吉川元長御家人に罷出御奉公仕候事

尼子勝久鬼城被明退事

付宮吉落城之事

一天正三年九月元春隆景兩將私部の城を攻取たまへ共いまた勝久鹿之助籠り居候若佐の鬼城堅固なるに付元春より杉原盛重香川兵部小坂越中を相添三千餘の人数を被差向候處に草刈三郎左衛門一千餘の人数にて加勢に罷出我等方角の儀に候條先懸可仕とて一番に切岸迄押寄る城中よりも人数出て鐵砲のせり合有之敵味方に手負死人数多御座候此様子を杉原香川小坂見及一同に突て懸れば敵は城内へ早速引入其後は總勢仕寄を付て攻寄るに付勝久不叶夜に紛れて城を明け但州へ被逃上候也

一同國宮吉の城には田公新右衛門同新助籠り居候杉原香川小坂人数を押寄せければ取物もとりあへず田公父子城を捨て逃落る香川郎等三宅源之丞一番に城へ乘込能敵一人討取總勢も一時に乘候處主の田公を可落ため残り居候者四十人罷居能働き一人も残らず打死

仕候此城落去して因州一國悉く治りければ元春隆景御一同に同月廿五日因州を引拂ひたまひ雲州平田迄御打入候小早川殿は平田より藝州へ御歸陣也

大坂城中へ被入兵糧事

一元龜元年大坂本願寺顯如上人光佐と織田信長不和の儀出來して上人攝州大坂に城廓を構へ諸國の門徒を頼み被申に依て信心の輩我先にと馳集るに付光佐大坂の城に籠り申候其後四五年も候て城兵糧無之籠城難續に付此御方へ兵糧御見續被下候様にと頼み被申候其次手に萬端御武威を以て遂本意度存候偏に奉頼の通被申越候輝元公御如在に不被思召の通御返答候て頓て飯田越中を爲御使被差上候其後兵糧の儀は早速御見續不被成候ては不相叶儀と御評定候て兒玉内藏丞粟屋内藏丞香川左衛門尉村上八郎左衛門浦兵部少



野島大和守同掃部助等に被仰付兵糧船六百餘艘警固船三百餘艘被差上晝夜急き申候故七月上旬に播州室の津へ著船仕候信長よりも木津川口に大船懸置其外兵船三百餘艘にて西國よりの通路を差ふさかれ候敵船の大將には大和の住人間鍋主馬兵衛沼野伊賀守同越後守河内の住人杉原兵部丞宮崎鎌太夫寺田又右衛門尼ヶ崎の小畑花隈野口など云者共也此方の衆於室談合仕り先つ物見を遣し敵船の模様を窺ひ可然とて差越けれ共一向近所へよりつく事も不成候故敵船數百艘懸雙て有之と計申に付更は敵船の働をこゝろみんとて射手船五十艘遣し呼引せければ敵船も漕出し追合候いろくくと調略仕候内紀州の鈴木孫市室津へ罷越候に付一戰の評議仕候へども差たる手立も無御座候故各中談に兎角無二に押掛切取申すより外は御座有間敷と一決仕り三百餘艘の射手船を押立て其跡に兵糧

船を引付大坂川口へおし懸候處に右の敵船の大將共下知仕三百餘艘の兵船を押出し防戰仕候中國船手の者共は船軍仕馴候故次第に敵船をせり込候爰に大船一艘此方の船に向ひ真先にすゝみ働き候村上八郎左衛門自分の乗船を押立させ急に敵船へ押掛候間近くなり候時船頭申様に敵船へおし付可申哉と問候へは八郎左衛門聞ていふ迄もなし押付候へと巾に付其まゝ押付候處に鐵砲をそろへ打立候故水主共打ちめられて三四間程退候時八郎左衛門聲をわけて船頭船子ともに何とておくれ候哉臆病者共とてしかり申候へは其勢ひに船を件の大船へ押付候一番に八郎左衛門乗込候處に鍵を以て股を突れ候へ共事ともせず其敵を鍵にて突伏首を取り家來の侍一時に乗込船中の者共を不殘切伏終に大船を乗取浦兵部少村上掃部其外一等に敵船へ乗移り敵を突伏切付あたけ二艘乗取小船は

不知數敵の大將間鍋主馬兵衛沼野伊賀守同越中杉原兵部同鹿目介野口小畑以下討死する寺田又右衛門一人は海へ飛込遊き上り一命を助るとなり中國勢得勝利大坂の城へ兵糧を入歸帆仕候事

浦少輔四郎逆意之事

一大納言義昭卿に頼まれ給ひてより以來上方手切に成諸所にての取合止事なく候然は浦兵部少宗勝方へ小寺官兵衛蜂須賀彦右衛門より申越候は信長公致御味方西國への先手被仕に於ては忠賞可任望の通に候兵部少承り曾て信長の御味方申儀不相成候毛利家の懇意を請候事數十年以來の儀に候委細不能申候重て被申越間敷の通申切候兵部少嫡子少輔四郎事は備前國常山と申城に罷居候に付右兩人の衆より少輔四郎方へも申達候へは即時領掌の通返事仕候其頃備前兒島渡口究として神田右馬介を被差置候處に怪しき行脚の僧

來り候に付色々究め候へとも經文など申候て様子難分候され共何とやらん不審なる事も御座候に付此僧をいましめ手包など見申候へ共證據になり候物も無之候故杖に突申候竹を破らせ候へは其内に小寺官兵衛蜂須賀彦右衛門より少輔四郎方への書狀御座候に付彼出家へ件の書狀相添沼田へ差上候隆景御覽候て父の兵部少を沼田へ被召寄右の通密に被仰聞候へは兵部少大に驚き拙者儀夢にも不存候へ共御不審を晴し可申様無之候間世倅同前に切腹可仕の通申上候隆景被聞召其方別心無之段は御存の儀に候今以少しも御不審に不被思召候間左様被相心得候へと重疊被仰候少輔四郎儀は沼田へ被召寄父の知行所へ被遣押籠置候天爵にて候哉頓て死去仕候事

讃州元吉合戦之事

一讃州浪人香川と申士御當家へ致參上數年罷居歸國の願申上候に付何とぞ歸國被仰付度被思召御人數渡海可被仰付と御議定候處に同國多戸郡元吉と申城に三好遠江と申侍罷居候三好家臣にて候へ共此御方へ致御馳走候然處に阿州より元吉へ取掛候由注進に付幸の儀に候とて天正五年穗井田治部少輔元清を大將として福原式部少元俊を被差添八千の御人數渡海被仰付候御先手の警固衆元吉の坤に磨臼山と申す山御座候是に陣所居候處に三好勢元吉の城へは働き不申候て警固衆陣所へ押寄候に付浦兵部少井上又右衛門二千の人數を以て同年閏七月廿日遂一戰即時得勝利候末近助兵衛山田半右衛門志道藤右衛門村上刑部少深野弘中鍵を合せ無比類働き仕候其時元吉の城よりも突て出兩方より追打に百計首を取候然共元吉の城より一里計候て長尾梅喝と申三好家臣一城をかまへ罷居候に

付元吉の城普請等被仰付候て三好方と御取合の覺悟に候阿州より大勢打出申候は、輝元公も御渡海可被遊と御議定候て備後の三原に御在陣被遊候御馬廻の衆八百計先立て渡海被仰付候隆景は備中笠岡に御在陣被成候然處に仙石少貳と申仁取扱仕候て和談に成阿州よりは三好同名の士兩人元吉の山下へ罷越候元清元俊も御陣山より御下り被成候て右兩人に御相對候三好遠江守も阿州へ隨身仕候香川儀はいかゝ成行申候哉舊記に見え不申候三好方と御和談に相成候上元清も御歸帆被成候浦兵部少は歸陣候次手に播州の浦々へ船をよせ候て放火仕候就中高砂は黒田官兵衛領地に付部府に人數を被籠置候兵部少船を岸際へ押寄せ打上り候へは城よりも人數を出し防戦仕候兵部家來白井彌二郎其外雜兵討死仕候兵部少敵の様子見合頓て船へ乗候處に黒田官兵衛二千計にて打出備被申候兵

部少も十死と存極め候て待居候處に官兵衛何と被存候哉不及一戰  
人數を引入被申に付兵部少も頓て乗船仕罷歸候事右元吉の城御加  
勢の警固衆一戰に得勝利隆景公へ注進申上候書狀に

急度遂注進候一昨日廿日至元吉之城敵取詰候衆 長尾 羽床

安富 香西 田村 三好安藝守等三千程從廿日早朝尾經水之手

へまかと寄詰候元吉難儀不及是非候條此時は及一戰安否候はて

不叶儀候間各覺悟致議定自警固三里罷上り元吉向磨白山と申に

陣取則要害成相副力候處に敵馬武者數百騎れし寄乘入候初合戰

衆不去鍵床請留候□條從摺白山悉く打下し仕掛候河縁に立合候

河口思切渡掛候間一息に追崩數百人討取候首注文其外様體鴉新

右歸參之時可申上候淨念に相含候恐惶謹言

閏七月二十二日 乃美兵部丞宗勝

□は文  
字不明

兒玉内藏太夫就英

井上又右衛門尉春忠

桂 民部大輔元賢

杉 次郎左衛門尉元相

栗屋右近助元之

古志四郎五郎元清

杉民部太輔元重

村上彈正忠景廣

村上刑部太輔武滿

包久宮内少輔景勝

杉 七郎重良

冷泉民部太輔元滿

岡 和 泉 守 殿

淡路岩屋之城之事

一淡州の在廳人菅平右衛門と申者岩屋の城に罷居毛利家へ屬し候に付先年より兒玉内藏丞を被籠置候或時菅父子逆意仕内藏丞を可討果用意仕の通密に申聞せ候者有之内藏丞存候は無詮所にて犬死可仕より藝州へ罷歸此段申上早々打手に罷越退治可仕と存し城を忍ひ出罷歸り元春隆景へ申上候へは御詮議の上菅父子を退治仕直様岩屋に居城可仕とは御差圖難被爲成候可罷向と存し候者は申出候様にと御意被成候然共私可參と申出候者無之處に香川左衛門尉弘景可參と申者無之所へ行てこそ誠の忠義なるへけれ又末代迄の譽にも可成なれば我等可參とて從弟の冷泉民部太輔元滿と申合兩人望み申候へは輝元公御感不斜頓て御暇被下乗船仕候處に菅平右衛

門同新右衛門より以使者申上候は兒玉殿虚説を被聞候て御退出無是非奉存候殊に御忍候て御下り候故御理も不得申候以來の御不審時爲可中に候とて寵愛仕候娘を人質として差下し候に付香川冷泉不戰して譽を取其後緩々と致支度岩屋の城へ籠り申候或時大坂天王寺より佐久間信盛家人共一千餘人夜打を懸候折節香川夜廻り仕夜懸の人數に行合防戰仕る家人共も手強く働き候へ共己に香川討死可仕哉と見え申候折節冷泉民部出合敵を切立ければ不叶して引退く冷泉事引敵へ追懸十五人打果し首を取候其後は何たる事もなく堅固に城を守護仕罷居候秀吉と此御方の御和談の後兩人共に藝州へ罷歸候事

播州上月之城之事

一天正五年に尼子勝久山中鹿之助立原源太兵衛其外尼子家の浪人共

近年は惟任日向守に屬し居候へ共此度は羽柴秀吉の手に屬し播州へ下り候然處に同國上月の城に浮田直家より眞壁彦九郎と申者を被籠置候此様子を聞て先此城を攻取へきとて二千餘の人數にて上月へ押寄る彦九郎あはて者にて驚き騒て城を明欠落仕る就夫勝久上月へ入替り被居候處に彦九郎弟に眞壁次郎四郎と云者あり兄の彦九郎聞逃仕候を口惜く存し直家に申けるは御人數三千私に御付被下候は、上月を攻取可申と望み候に付直家分別にて次郎四郎に三千の人數を被付けられは不淺悦ひ同六年の正月上旬上月へ押寄六十町計隔て陣を取明日は早天よりおし寄攻散すへきとて油斷仕罷居候に付城より物見を遣し油斷の様子をとくと見すまし其夜夜討を懸候へは諸卒悉く逃散候され共次郎四郎は床机に腰を懸采配を取て敵は小勢なりいやしくも逃るもの哉返して打拂へと高聲に匂

り怒る處にすはた成歩行武者走り來て刀を以て切へきとするを眞壁見てやさしやうぬめと云て眞向二つに切破る續て安達治兵衛と云侍懸來て眞壁を切伏首を取る城兵得勝利大に悦ひ城中に引入直家此由を聞て大軍を催し上月へ出馬せられければ山中鹿之助など相談に兵糧の貯へ一圓に無之候間籠城成間敷とて勝久其外城兵上月を引拂ひ攝州へ上られ候就夫直家より上月十郎矢島某兩人を被籠置候然處に秀吉大軍を卒し上月に押寄十重二十重に圍れければ城中の者共若己か命助かるへき哉と存し上月矢島兩大將を打て首をさへけ詫言申けれ共秀吉無承引悉く搦とらせ張付にかけ籠笠をきせて總躍をさすへしとて火を懸燒殺して又勝久山中立原を籠置れ候也

播州上月之城責之事并秀吉後詰之事

一輝元公播州上月の城可被責取被思召吉川殿小早川殿其外御一門中御家老衆被召集御評定候處に各一同に可然存候と被申に付御手分被遊候先小早川殿御支配は穂井田治部少元清天野六郎左衛門尉元政宍戸安藝守隆家嫡孫備前守元續國衆には三吉式部少高野山入道久意久代新十郎檜崎彈正少弼平賀太郎左衛門尉三村紀伊守清水長左衛門草刈太郎左衛門名代小笠原少輔七郎上原右衛門太夫田治部藏人伊勢細川の一族御旗本より福原桂兩人被相添以上其勢二萬餘人也吉川元春の御手に屬する衆は御嫡男治部少元長御次男右近丞元氏御三男民部少經言後稱廣家毛利七郎兵衛元康天野中務太輔元明國衆には山内新左衛門尉益田右衛門佐羽根兵庫佐波越後守同又左衛門尉都野駿河守三澤三郎左衛門尉同攝津守宍道五郎兵衛多賀吉六郎天野紀伊守三刀屋彈正左衛門古志因幡守湯佐渡守杉原播磨守嫡

男孫三郎有地右近南條伯耆守尾鴨官兵衛山田出雲守小森和泉守吉田肥前守日野左近福與利治部少同藤兵衛田利小曳周布兵庫頭祖式都治以下其勢一萬五千餘人御船手は兒玉内藏丞粟屋内藏丞村上八郎左衛門浦兵部少以下軍船七百餘艘にて播磨瀧明石須磨の浦に至りて警固仕る浮田直家は病氣に付家臣岡越前守戸川肥後守明石飛騨守浮田七郎兵衛長船紀伊守浮田淡路守岡強介沼木新右衛門花房志摩守中村三郎左衛門伊賀左衛門富山平右衛門市五郎兵衛蘆田五郎太郎延原内藏丞浮田河内守小原入道信明檜原監物以下其勢一萬四千人罷出る御旗本御人數五千人總して五萬餘の御人數也天正六年三月三日御出馬御日取にて輝元公は吉田御出馬也元春は雲州富田を御出馬有て作州高田通りを押たまふ隆景も同日沼田御打立被成總人數の勢揃へ有て上月へ押寄給ふ輝元公には二陣に御ひかへ

被成可然との御談合にて備中松山に御在陣被遊候扱總軍押寄候時  
二宮佐渡守凱歌頭を揚候へと元春被仰付候へは佐渡守紅のつかみ  
染の帷子を著し指物の金の團を取て城の方へ向ひ三度招き三度目  
に関を揚る関頭三度目の聲に付て總勢関を揚候まことに天地もひ  
く計に候其後兩川殿御本陣は不及申諸陣共に芝土手を築堀を堀  
壁を付柵をふり亂杭を打て手堅く被仰付候殊に城大廻りの柵を出  
入者有に於ては究むへきため元春よりは新見左衛門森脇相摸守隆  
景よりは檜崎彈正付置たまふ左候て後總軍の鐵砲をそろへ一時に  
御打せ被成候晝夜共に仕寄を付攻申候處に爲後詰羽柴秀吉荒木攝  
津守四萬餘の人數にて四月晦日高倉山に陣を取此高倉山を中國勢  
二つに分り一勢は後詰の上方勢と對陣し一勢は城を取此高倉山を卷稠敷攻詰  
城の堀際より十間の内へ仕寄を付よせ候然は檜崎請取候仕寄より

大筒を仕懸城の矢倉塀を打崩し候處に山中鹿之助工夫仕り夜まき  
れ大筒を取せ申鹿之助茶湯坊主に三人力有之者御座候に付一方の  
小口を此坊主に持せ一方へは三人持申候者を遣候處に右の坊主臆  
病者にて内々の力半分も無之持候事不相成候て大筒を谷口へころ  
はし申候其所篠山にて音高く聞え申に付仕寄番の者聞付候て出合  
申候右の大筒に綱を付城へ引込申候様に仕候へ共落し所田にて小  
口はまり城内へ引込事不相成候内に仕寄に居候者共十人計出候て  
切拂ひ無難取返し申候爰に六月九日の夜周布兵庫頭元兼受口へ城  
より夜討出申候に付元兼鍵を提け懸付夜討を追拂ひ退敵へ追掛鍵  
にて敵を突伏せ候處に脇より敵鍵を以て突申に付三十三歳にて則  
討死仕候家來共敵を追拂ひ元兼死骸無異儀引取申候輝元公被聞召  
御不便に被思召との御意にて嫡子幼年に御座候とも跡職無相違被



仰出一家の者共雖有奉存候事

杉原盛重家來忍之者之事

一 杉原播磨守盛重は内々忍能仕候者數人かゝへ置候に付此者どもを呼よせ其方など申談高倉山の敵陣へ忍ひ入陣中の作法能候哉油斷仕掟も正敷無之候哉窺見可申と申付候故彼者共申合せ五月初旬一入暗き夜に紛れ高倉山へ忍入候其者共は徳岡久兵衛佐田彦四郎弟神五郎其弟小次郎菊池肥前別所雅樂允此等は頭分也以上二十四人敵陣へ忍ひ入て見れば篝火など消たる所もあり又かすかに成たる所もありいか様掟不正候様に見え候篝火を燒候者睡り居候に付徳岡久兵衛首を打落し取候を見て殘る者共いつれも陣屋へ忍ひ入手毎に首を取申候其中に別所雅樂允寢て居申候者の首を寸の長さ刀にて打申候へはさきへつかへ切はなし不申候に付此者聲を立候就夫

陣中騒動仕るされ共雅樂允右の者の首を打落し杉原盛重家中別所雅樂允一番首を取て罷出候陣中勇士あらは出合討留られよと名乗て各一同に向の山の尾くひへ退候少々追懸候者有之候へ共所は無案内なり大に暗き夜なれば付慕ふ者もなくやすくと罷歸り候夫よりして敵陣の掟正敷なり篝火たへ間なく候され共其後も兩度敵陣へ忍ひ入首を取歸候事

上月後詰加勢之事

一 上月後詰小勢に候通秀吉より被申上に付信長聞給ひ明智日向守筒井順慶武藤彌兵衛尉瀧川左近以下爲加勢被差下候此衆四月廿八日京都を出足仕五月初には上月著陣候右の衆に引續被指越候は北畠中將信雄神邊三七信孝織田上野介信澄長岡兵部太輔蜂屋兵庫氏家左京伊賀伊賀守稻葉伊豫守佐久間右衛門尉等一日二日路を隔て各

出馬に候信雄信孝は信長御出馬爲聞合攝州に被殘候其後城之助信忠に丹羽五郎左衛門被差添三萬の人數にて播州まかまと迄下られ候加勢の人數段々引續き上月著陣仕候に付五月中旬には八萬餘に成候然は吉川元長の仰に兎角秀吉陣所へ夜合戦を可被懸候間敵陣の様子委細に見可申旨被仰渡候て足達彦左衛門佐伯源左衛門被遣候此者共敵陣ちかく山傳に罷越具に敵陣を窺ひ候て罷歸り様體申上候へは則元春へ被仰上候元春被聞召尤宜しきおもひ立也隆景へ談合あるへし定て隆景も可爲同意候へ共とくと示し合可然の通御返答に付隆景へ御談合候へはとくと御思案候て先つ夜合戦を被止可然候手前存候旨御座候只先つ片時も早く此城乗取候御才覺最に候と達て制止たまふに付元長無力夜合戦を止給ふ也

上月合戦之事

一高倉山の麓に小川あり此川へ敵陣より朝毎手水に出又は馬ひやしに數十人罷出候に付浮田直家家來美作の住人中村三郎左衛門と申者伏兵を置いて敵の出るを待隆景御家中井上彌兵衛も中村同前に罷出候處にいつもの如く敵數多出候時伏を起し鐵砲にて雜兵三人馬乘一人打伏申候此様子を見て上方勢陣所近き者共懸付候此方の者共は纔四五十人にも不足の人數にて候へは既に危く見え候處に宍道五郎兵衛政慶三百計にて助來り上方勢を追拂ひ候然る處に高倉山より中村式部少神子田半右衛門五百計にて打下し宍道五郎兵衛中村三郎左衛門と相戦ふ上方勢は引續打下し候に付宍道中村勢働不自由に候是を見て南條伯耆守元續尾嶋左衛門元清一千餘にて援來るされ共中國勢旗色惡敷候に付吉川殿御家中繁澤殿家來馳加て相戦ふ南條家中一條市助繁澤殿衆江田次郎兵衛山田出雲守家中山

田理兵衛同外記鍛冶屋市助佐伯五郎四郎吉田肥前守家中瀬屋孫右衛門吉川殿御手都野主水境孫次郎湯頭助兵衛遠藤彌九郎足達彦左衛門小早川殿衆兼久内藏丞鑓を合する杉原盛重家中渡邊某所原彌太郎入江平内かけ付鑓にて敵を突伏首を取吉川殿衆は遠藤彌九郎討死仕る杉原一手の所原兵庫も討死する是は南條元續家來なり爰に南條家來の者手負臥居申候を星野越後と申候福島左衛門大夫殿衆主の左衛門大夫に首を取らせ候此時は市松と申て若年に候初ての高名なり左候處に敵勢二萬計上月の郷へ打下す南條杉原宍道中村此衆の人數五千餘押立られ次第に旗色惡敷見へ候折節杉原盛重嫡子彌八郎元盛次男景盛吉田肥前川口刑部を相伴ひ二千餘にて打て出る吉川殿衆には今田中務吉川式部山縣四郎右衛門森脇右衛門香川兵部を先として一千餘人杉原と一手に成て打て出る是を見て

天野三澤三刀屋古志益田其外雲伯石州の勢一萬餘悉く打出る吉川元春兼て杉原播磨守方、吉川式部香川兵部兩人を以て先勢合戦初るに於ては火を立可申通約を被定候に付て盛重如約束火を立る此相圖を見給ひ吉川元長舍弟元氏經言馬を出さる、杉原南條も相加る吉田の御旗本も馳來て打向ふ高倉山の上方勢本道筋の合戦初るを見て秀吉の旗本はいふに不及蜂屋氏家伊賀伊賀守稻葉佐久間何れも打出備を立る先勢は中村式部少神子田半右衛門尾藤神右衛門大谷刑部少木下備中宮内以下五千餘人進て出る其次は黒田官兵衛同吉兵衛同兵庫蜂須賀彦右衛門一柳市助堀尾茂助三千計にて備を立る其跡には信長より後詰衆の加勢に被差越候上方勢都合四萬餘人備を立ひかへ候元春よりは軍使を以て軍様體聞たまふ上月川を隔て矢軍初り候へ共昨日より今朝迄大雨に河水増り水濁りければ

淺深不知候に付味方の勢渡し兼候處に吉川經言名乗て一番に上月川へ乗込たまふに付吉川勢我意地増に渡し候元長元氏此様子を見給ひ經言うたすなど川水に馬を入給へは杉原南條押續て渡候に付上方勢此いきほひに押立られて引退く二陣の黒田官兵衛同吉兵衛同兵庫介蜂須賀彦右衛門一柳市介堀尾茂助宮部善乗坊等馬を進め馳來る元長采配を揮たまへは士卒皆一同に居敷鐵砲を以て矢次に引請打候に依て敵方馬上の侍數多打て落す就夫さしも勇みける上方勢不得掛して足もとしどろに成る此様體を見給ひ元長下知を以吉川勢突てかゝる杉原も一手に成て懸る京勢こらへかねて三四町計引退く敵引は鼓を靜に打て進み來れば居敷て鐵砲にて打ちゝめ候事及兩度因茲上方勢終に崩立て高倉山の麓迄二十四町逃退秀吉の本陣其外後陣の勢味方利を失ふを見て大勢打下す是に力を得て

逃退候上方勢取て返し備を立る中國勢は居敷弓鐵砲を先に立るたかひに矢軍計なり荒木攝州は同勢の備候山の岑に人數を立居候可打下事なれ共此御方へ志しあるに依て見物して不構候浮田は自分の陣所と秀吉の陣所高倉山の間に少し高き山ありしかも尾續きなれは此山へ人數を揚て秀吉の本陣へかゝり候に於ては必定可得勝利候得共秀吉に内通有之に依て雙方の勝負を伺ふて不働候元春隆景は城を攻させ備中備後の人數一人も戰場へ出されず軍使を以て戰の様子を聞たまふ斯て中國勢高倉山の麓迄敵を追詰山上を見れば秀吉も本陣を出て備へらるゝ總勢は山半分迄下りて備を立る此御方にも足輕を先に立鐵砲を打せて被備掛候處に大谷刑部神子田半右衛門尾藤神右衛門蜂須賀彦右衛門其外相加りたる者あると見えて七千餘人足輕を先に立面もふらす懸て來る元春是を見給ひ采

配を揮上て下知し給へは民部經言左近允元氏杉原盛重父子吉川家中今田中務吉川式部香川兵部其外伯州の住人吉田肥前牛尾大藏左衛門を始として懸出馳向ふ處に元長下知を以て各居敷或田の畔に腰を掛鍵を膝の上に乗せて敵の懸るを待敵も最前の勢ひに違ひ不得掛してひかへ候其中に大谷刑部一人爲物見かけ出味方をはなれて馬を乗廻しもとの備に歸る中國衆も敵の逃るを追けるに付備所深入にて引取時は如何可有之哉と心遣仕處に天野紀伊守隆重三百人許召連て後の山へ打上り彼方の山陰に多人數控へたる様に見せて味方の機を助けらるる穗井田治部少元清も此方の備より右の方へ打出らるゝ折節高倉山の茂りに隠れ居たる敵出て鐵砲を打掛後は麓へ下りて彌々弓鐵砲を射掛るに付元清一手の人數計にて一文字に突てかゝられければ一支もせず元の茂りに逃入其時元清も股

に鐵砲の手を負たまひけれ共事ともせずして働給ふ然は輝元公より爲見合兒玉小四郎轉與三右衛門を頭として鐵砲三百挺相添被差出候小四郎高倉山の麓へ行て見れば敵堤を楯に取て鐵砲を打掛るに付其儘鍵を提て懸る處に若林藤兵衛傍に居候故小四郎草摺を取て引留能時分を申へし待れ候へと扣させ敵の様體見繕ひ時分能といへは小四郎鍵を取て突て懸る一手の侍我不劣と掛りければ敵不堪して引退小竹の一村有之所を楯に取て待懸申候小四郎續て追懸藪内匠と小竹の藪の中に置たかひに名乗合鍵を合す勝負いまた不付處に小四郎家來三戸善兵衛と申者内匠鍵をくしきて取之小四郎も鍵疵を蒙る若林も敵を突首を取菅田三郎左衛門事は太刀にてせり合鍵を以て股を突れ手負候へ共敵の鍵を切折て取候藪内匠事は口利たる武者にて候故上方にて兒玉小四郎と申侍大將と鍵を仕候

と申廻り候故元兼手柄一入名高く聞え申候左候處に高倉山に備へたる大兵悉く打下し候中國勢敵のいまた下り不果以前に懸て合戦を始め主人うたるれ共かへりみす親死すれ共不助敵味方の死骸を乗越く相戦ふに付大兵たりといへども次第に敵をせり詰追退るに秀吉の本陣より崩立て山上へ逃上るされ共先陣の備殿となつて一段く繰引に曳上げる中國勢利を得勝に乗て追懸く敵を打取る然處に逃るを追ふも敵により所によるなり長追仕間敷由元長下知に依て夫よりは不追して歸る京勢山上遙に逃上るを見て中國勢を打入るなり上方衆と初ての合戦に得勝利候とて元春隆景御機嫌不大形下々に至まで悦合申候扱京勢は二十九日の曉悉く敗軍して書寫山へ引退候事

上月落城之事

付山中鹿之助被討果事

一上月の城後詰の上方勢敗軍候に付城兵力を落し元春隆景へ山中鹿之助より使を出して此度の企まつたく勝久の所存にわらす神西三郎左衛門所爲にて御座候間彼者に切腹可申付候勝久助四郎以下城兵御助被下候様にと再三達て侘言申候へ共兩川殿會て御分別被成すに付鹿之助勝久へ申候は再三申斷候へ共分別にて無之候此上は不及力候條御切腹可被成候某も御供可仕候へ共無面目降人に罷出元春に近付刺違御死後の御弔に可仕と申しければ勝久聞かれ我等事出家と成て居候處に各心入を以て一度尼子と名乗大將の號を汚らす偏に家運の盡たる處なり自分には命を全くし時節を以て揚義兵尼子家を再興の志何よりの忠勤なるへしと云給ひ七月三日勝久

切腹なり同日尼子助四郎加藤彦四郎切腹する神西三郎左衛門は一日先たちて自殺仕候立原源太兵衛は城を忍び出上方へ上り蜂須賀彦右衛門を頼み罷居候其後鹿之助降人となつて雑兵同前に下城仕候元春隆景御兩將より御誓紙を被成被遣候其後鹿之助へ元春御對面の刻定て可刺違とは可存候、共座敷を隔て目見有之殊に番衆歴歴並居申に付鹿之助存意も空敷退出仕る左候て周防の内にて知行五千石被下候て防州へ可罷下の由被仰渡候粟屋彦右衛門山縣三郎兵衛被差添候て上月を出足仕候處に元春隆景より輝元公へ御内意共有之候哉輝元公御意に兎角鹿之助儀は御果し不被成候ては難被差置者にて候間御成敗可被成とて天野隆重養子天野中務元明へ被仰渡候て備中松山の麓阿部の渡りにて被仰付候鹿之助は妻子下人ともを上下三下計先へ渡し候て河端の朽木に腰を懸先船の渡り

申候を見合居候鹿之助には後藤柴橋と申家人二人付居候天野元明の家の中河村新左衛門と申者能時分を見繕ひ鹿之助後へ廻り一太刀打付申候へは是はと申候て則川へとひ込申處を福間彦右衛門川へ飛込頭の方を押へ候河村も則時飛込候へ共押へ候處足の方にて候故彦右衛門首をかき落し差上申候柴橋と云者は鹿之助縁者にて候渡邊又左衛門宇多田右衛門兩人して討果し刀は右衛門取申候首に掛申候大海の茶入は又左衛門取申候右の刀各見候て鹿之助常に荒身國行を所持仕の由承及候必定新身國行にて可有之と申に付刀茶入輝元公へ指上申候へは刀は國行無紛に付被召置茶入は御用に無之とて被差返候後藤をは三上平兵衛討果の由に候鹿之助妻子をは雲州の者にて候に付彼地へ送らせられ候事

草刈太郎左衛門事

一此度上月の城御攻被成候刻草刈太郎左衛門重繼儀自分は敵國境目に罷居候に付御供不仕黒岩土佐守同苗對馬兩人を頭に致し騎馬百二十騎總人數八百餘人差出し御馳走仕候に付近國の侍大將衆も草刈御馳走を手本に仕各堅固に御味方申候父をは草刈加賀守衛繼と申先祖代々因幡國知頭郡本領として持來り候近年には作州の内高房郡一郡切取候て二郡の領主と成因州淀山に居城仕候然に太郎左衛門兄三郎左衛門景繼事山中鹿之助を頼み候て信長へ申上候は拙者儀毛利家へ屬し數年罷居候元就代に大内義長陶全姜入道退治被仕其後雲伯働の節拙忠義候其上筑前立花陣の節尼子勝久因州へ發向し夫より雲州へ亂入の刻因幡伯耆雲州三箇國平均に勝久に隨ひ候其節拙者一人淀山を持こたへ一國一城味方仕候剩へ及一戰片寄市之丞と申隨分の者を初め數十人討取吉川元春出張を待付候箇様

に忠を盡し候へ共取立不被申に付遺恨に存し候向後御取立被下候は、隨分御味方仕可遂忠節の通言上候信長御聞届候て西國へ御馬向られ候間御馳走仕候へ忠賞望に可被任の通御朱印被下候處に小早川殿衆右の使者を討果し信長よりの朱印を差出候に付隆景驚き給ひ早草刈家老黒岩土佐其外一兩人御用候とて被召寄右の朱印御見せ被成早速罷歸三郎左衛門に切腹申付候へ家を御立被成可被遣候此儀御僞にて無之通御墨附被遣候就夫各罷歸談合仕三郎左衛門に切腹させ申候左候て三年過弟の太郎左衛門に家續被仰付候領知無相違被下置候て被對太郎左衛門并家老共御疎意有之間敷通御誓紙を被遣候此段忝奉存衆を拙て候て御奉公申上候左候處に大谷刑部少より太郎左衛門方へ申越候信長御味方仕り西國への御先手いたし候は、知行一廉可被宛行旨書狀差越候太郎左衛門不及返答



使の者追返し申候其後秀吉より新免猪之助と申者を被差越信長御味方可仕旨被仰越候へ共右の通に御請に不及使者差返し候へは又秀吉より知行方の御書付に因幡に相加へ二箇國可被遣候此段御爲無之通直判の神文を以て被仰越候此時は出家一人相添兩使にて候太郎左衛門曾て承引不仕近所の侍中招集め上方への手切として出家をは刎首使者をは搦取御神文等相添爲檢使被付置候藏田與三右衛門に相渡候へは與三右衛門より隆景へ申上に付作州高田へ被遣檜崎彈正に被仰付はり付に被掛候なり秀吉の御神文は太郎左衛門に被遣候故彼家に于今御座候太郎左衛門代に成浮田直家事御敵に成候に付て作州は弓矢のちまたに候或時直家太郎左衛門居城へ働候刻も遂一戰數十人打捕得勝利候又秀吉の先手宮部善乗坊木下備中守八木磯邊等太郎左衛門居城へ被差向に付押寄候其節も及一戰

歴々の者共數人討取兩度の軍忠狀差上候へは輝元公御一覽候て御袖判被遊被下候また居城へ浮田方より付城數箇所拵候て諸口の通路差ふさき候へ共堅固に持こたへ候故榊形岩屋高田多治部等の城一筋堅固に持ぬき申候居城及難儀候時は太郎左衛門抱の端城も居城へつはみ申候就夫淀山の城へは木下備中守祖父隱岐土佐と申候者人數六百にて籠候處に居城より夜掛に攻崩し隱岐土佐をは家來の進市兵衛と申者と塚原一傳兩人にて討取申候草刈抱の端城笹山には小原新明と申者其外直家人數籠置候處に太郎左衛門弟與次郎事幼年より人質に罷居候に付十七歳迄手柄不仕候を無念に存し自分的人數計三百召連候て笹山へ拔懸仕候處に敵小人數を見切候て道口へ人數を廻し取切候て一人も不殘討取申候此段鬱憤不少候て居申候折節笹山より人數を出し候に付則居城高山より打下し笹山

麓まで追込令放火其儘城を乗崩し候新明事は欠落仕候に付討洩し申候殘る者共悉く打果し笹山に一夜陣仕候て居城へ罷歸候兩度共に輝元公御感狀被遣候又或時尼子勝久方へ山中鹿之助遣し候飛脚を討果書狀を見申候へは太郎左衛門事毎度先掛仕味方失勝利候向後は先掛の者二三十人討取候は、其内に可罷在候間太郎左衛門討取可申候其工夫仕るの由に候其狀を沼田へ上げ申候へは隆景より草刈家老の黒岩方へ御書被遣候其文に

太郎左衛門殿毎度御魁之由尤雖御手柄候於御越度は其境弓矢之種を失候條碓以來御用捨可然候此通旁之御異見肝要に候御賢察之前に候恐々謹言

と被遊候其御書御感狀于今彼家に御座候鳥取落去の節も淀山の城にこたへ堅固に御味方仕候備中高松落去の刻も一筋に存極め罷居

候處に信長不慮の儀にて京都御和平に成御國分の時美作因州御上表に付輝元公よりは井上新兵衛元春隆景よりも一人宛御使被下其旨被仰渡候に付先祖以來の舊領併近來切取申候所領等悉く浮田方へ相渡罷下候へは備後山中に被爲置當分の堪忍料として防長の間にて纔の御心付被下候へ共少も愁訴不申上罷居候三年過候て隆景豫州御拜領に付輝元公へ被仰上豫州被召連白眞の城御預け被成候隆景御死去の後輝元公忝被成御意被召返小知拜領被仰付候關原御弓箭の後彌小身に罷成候に付草刈の苗字名乗申候儀いかゝ候て福岡に改罷居候へ共本名絶申に付秀就公御代に草刈に罷成申候是は古對馬守世倅對馬守代にて候事

浮田直家心替之事

一浮田和泉守直家は天正六年の春信長の味方可仕の旨密に使者をも

つて申通候に付上月へは煩ひと申候て不罷出舍弟七郎兵衛忠家其外家臣數多差出し候上上月落城候て後直家上月へ罷越落城の嘉詞を元春隆景へ申上此御勢ひに館野城御攻取被成候は、以來上方御發向の通路能可有之と頻にすゝめ申候兩川殿は如何可有之哉と御遠慮候へ共此度の勢ひに可然と申上候もの多分に候故上月を打立給ひ黒澤表へ打出陣取給ふ元長御事は備中松山に輝元公被成御座候に付上月の様子可被申上とて松山へ下り給ふ浮田直家は明石飛驒守居城八幡山に陣を取家臣に後藤と申者御座候作州三星の城主にて直家聳なり御當家へ無二心御馳走申上候に付たはかり呼よせ討果し其後兩川殿へ日を定め振舞の案内を申越候元春隆景も可有御出と御請合候處に八月二日の夜明石飛驒守方より弟勘次郎を使に差越し直家御振廻の案内申候儀全く御馳走にては無之候御兩人

を城中へ招き討果し可申企に候通申上候に付兩川殿驚き給ひ翌三日早天に兩將より直家へ御使者を以て急用の儀共を輝元より申越候に付唯今當地出馬仕罷下り候頓て令發向可得御意の通被仰遣御歸陣候元春は陸を御退被成候隆景は抄子の浦より船にて御退き被成候事

南條兄弟逆意之事

一南條伯耆守元續事上月より家城へ罷歸り候處に尼子家の浪人福山二郎左衛門と申者諫言を申候は信長武威日々月々に盛に成候唯今は日本に肩を雙る者無之候毛利家も終には信長の爲にはろひ可申候毛利家へ屬し候侍は根を斷葉を枯し可被申事眼前に候早速信長へ隨身可有之と再三勸め申に付弟の尾鳴左衛門元清其外南條備前守同九郎左衛門など呼集め談合候處に何れも此儀可然と申に付信

長へ可致馳走の旨羽柴秀吉迄申達此御方へ逆意仕候元春此段被聞  
召則ち山田出雲守を藝州へ呼寄給ひ南條心替りの段其方は不存哉  
と御尋候へは出雲守驚入此段夢にも不存とて誓紙を以て申理り候  
へはさらは南條兄弟に諫言を仕福山を討て出すへしと被仰付候出  
雲畏て請合早々伯州へ罷歸候へは福山無心元存候哉出雲所へ爲見  
舞罷歸候に村則ち射手を申付心易く挨拶など仕山田十右衛門に目  
くはせ仕候へは十右衛門打物達者に候故抜打に切申候處に其太刀  
不引取候内に雲州嫡子藏人續て切申に付さしもの福山も安々と打  
れ候依之南條兄弟出雲守居候構へうちよせ候折節山田方にも無勢  
に候故一方を打破り無異儀掛拔藝州へ罷下り候其後元春伯州御出  
馬候て南條御退治の御調略候處に元續元清より別心不存の通爲御  
理家老の津村と申者伯父甥兩人差出種々御佗言申上候へ共元春不

被聞召分候に付兩人の者夜中に欠落仕り同國の大仙坊へ逃込申候  
を杉原家中前原木工と申者大仙坊へ參り兩人共に搦捕差出候へは  
花見の額にて張付に被仰付候如此元春御立腹被遊候子細は四五年  
以前に吉川河内守娘を御養子に被成元續へ被遣別て御惡意に被思  
召候處に逆意に付一入御にくみ強く御座候事

市川少輔七郎逆意之事

一市川伊豆守經好嫡子少輔七郎事逆意仕候父伊豆守は上月御陣御供  
被仰付防州山口には經好名代少輔七郎罷居候其外番頭には兒玉周  
防守大庭加賀守に御附けの衆數多にて各籠居候處に無案内なる儀  
共にて些騒動仕候へども各能作舞候て少輔七郎を生捕候て上月へ  
申上候處に早速經好被成御下少輔七郎には經好切腹被申付内藤小  
七郎事能作舞仕候に付元春より兒玉周防守大庭加賀守への御書に

今度其表錯亂の刻内藤小七郎覺悟被申越誠に神妙之至に候此段御本陣へ可被仰上

と有之輝元公より右兩人への御書に

今度高嶺錯亂之刻内藤小七郎儀最前以來能覺悟神妙に被思召候此段可被申聞

と被遊候又少輔七郎切腹の時花やかなる衣裳にて罷出切腹仕候を市中の者共見物仕たる由に候其後山口市中の者に少輔七郎か亡魂付候て物に狂ひ候時まことの少輔七郎ならば采女の山郭公と云所の手鼓の手御自慢にて候御打候へとて鼓を渡し候へは成はと能打申したる由に候近年は左様の儀無之候事

大坂川口番船切取事

一天正六年從信長被仰付に依て九鬼大隅守嘉隆大船數十艘を卒ひて

伊勢より熊野の浦に出て雜賀の賊船と相戦ひ嘉隆得勝利敵船三十餘艘乗取夫より泉州堺の浦に著け大坂往來の船路を塞く殊に大船二艘大坂川口に掛置此船を白船黒船と名付矢倉を揚城の如くに構へ紀州熊野の侍高畠と申者を船大將に仕り數百の人數にて木津川の口に懸置候に付大坂城中へ西國よりの通路不相成彌兵糧無之城兵難儀候に付又兵糧の事上人より被申越候就夫警固衆不殘被差上候浦兵部少宗勝を總都合の見合に被仰付各一同に罷上り候處に彼樓船に大筒數多仕懸申候故近所へ參り見合せ候事も不相成候各談合に如此いたつらに罷居數日を送り候もいかゝに候間無二無三に押懸取可申候汐合時分の儀は宗勝見合せられ其上下知次第に仕懸可申と談合一決仕候左候て宗勝汐合時分見合せ相圖仕候と齊しく各我先にと乗かけ候總の船より村上彈正乗船半たき先へ乗付候樓

船の者共大筒小筒弓にて透もなく防ぎ候へ共此方の警固衆少もひかへすして取楳の方より乗込申候へは船を大人數してふみ返し候に付敵共みな海へ飛込申候を手よりく首を取數百人打果し得勝利候宗勝は不及申警固衆いづれも大手柄仕候上人光佐よりも宗勝方へ手柄を感し書狀差越申候中國勢於兩度手柄仕兵糧を城中へ籠候て歸帆申候事

花熊之城乗取事

一攝州兵庫より三里西の宮の方に花熊と申城あり荒木攝津守抱の城なり人數を籠置候此御方より大坂へ御手遣の支りに成候に付浦兵部少を大將に被仰付警固衆被差上候安武船其外兵船數百艘にて各罷登り兵庫へ著仕り此所にて安武船に大筒を仕掛船のかさりなどよろしく仕り翌日花熊に押寄候處に城兵稠敷相働宗勝乗船の水き

はへ大筒三つ打込候へ共木綿を破り内より繕ひ候に付無別條石垣際へよせ詰海陸より攻申候塀矢倉大筒にてうち崩し候に付不相叶城兵夜に紛れ欠落仕候に付て則ち城を乗取飛船を以て此段注進申上候へは御番勢として香川美作守杉二郎左衛門に人數を御付被成御檢使には桂民部少被差越候に付相渡警固衆は罷下候事

荒木攝津守御味方之事

一天正六年の十一月荒木攝津守村重輝元公御味方可申上の旨御内意申上信長へ逆意仕候此段信長聞付給ひ宮内卿法印友閑明智日向守萬見仙千代を攝津守方へ被遣異見仕候へどの御事にて三人罷下り色々異見仕候に付村重は分別仕我等不存分の處信長被差免候は、安土へ出仕可仕と申候て三人の衆差返し候處に家老共申候は一旦逆意被成各異見に付信長へ御隨身候共向後赦免被申候信長にて無

之候間迎も思召立候儀に候へは早く御背可然と申候故攝州も尤と存し彌逆意存し立候に付又小寺官兵衛に參り異見仕候へと被仰付被遣候處に荒木承引不仕却て小寺を生捕可申様に見え申候故官兵衛夜に紛れ退出仕罷歸候右之通荒木事此御方へ一味仕候に付花熊の城を相渡し御番衆いづれも罷下り候御番衆居候内城之助殿御發向の由風聞候去に依て其節浦兵部事淡路に罷居承り候故加勢に罷登り籠城仕相待申候處に案の如く城之助殿人數三萬にて城近く寄せられ候城兵も防戰の覺悟にて居申候處に何と被存候哉晩の七つ時に人數を引拂ひ退陣候其後は終に敵方より働候儀は無之候事

美作國諸所城被責取事并於賀茂御當方衆敗軍之事

一天正七年十二月初旬輝元公吉田御出馬候元春隆景元長經言御供也其勢三萬にて作州へ御發向有て同月九日小寺畑へ押寄責らるゝ處

に城主降人の御侘言申に付御分別にて城を受取申候同十六日大寺畑へ取掛給ふ折節砥石山の城兵欠落仕る處に吉川衆懸付數十人射取候其後大寺畑へ押寄たまふ城中に逆意の者有之同國高田の城に被置候檜崎彈正方へ相圖を定め城中の囚屋に火を掛候故彈正一番に懸付切岸へ付候吉川殿衆も是を見て切岸迄よせ掛候兵叶ふまじきと存るに付切腹可申と覺悟仕候哉城外へ出候處に直家加勢に被籠候富山半右衛門と申者制しけるは扱々各は臆病なる覺悟にて候不叶時は城を枕にして討死あるへしと云て踏留り候に付尤も同意仕候者三十人計城中へ引入候時跡に居候者を招き候を吉川殿衆味方と存し急に攻込候處を城兵矢先を揃へ射申に付朝枝源次郎討死仕る今田玄蕃其外手負多し早速に攻落す事難成に付先引退其後仕寄を間近く付候へは城主江原兵庫御侘言申に付被遂御分別兵庫は

家城笹吹へ罷退候又頓て笹吹をも明退候此ひゝきに岩屋の城も明退候に付宮山の城御取巻せ候刻隆景山見として城山の尻頭へ御登り被成御退候時城兵出て付送り候隆景御馬廻衆返し合せ敵を追拂ひ申候此時兒玉平右衛門討死仕候然處に此山の下に風呂御座候に付吉川殿衆入り可申とて風呂をたかせ申候城より見付二十人計忍ひ候て罷出風呂焼を討取申候此さはきを吉川殿衆聞付候時江田新左衛門山縣小七郎同二郎左衛門三人鐵砲を以て掛付麥島にてたかひに鐵砲打合候處に敵とも城の麓竹土居迄引取候へは又城兵六百計出候竹土居の内より敵二十人計出鍵を以て地打を仕ふり廻り候元春此様子御覽候て一千計にて御出被成候へは敵は早速引入申候各城門際迄攻付候今田孫十郎井下左馬允森脇彌五郎小笠原二郎右衛門手負候同朋正阿彌討死申候然は宮山の城も御佗言申明渡備前

へ落行候に付作州平均に治り申候故輝元公兩川殿寺畑に被成御在陣浮田方より伊賀左衛門を籠置候加茂の小倉へ付城可被仰付と御談合の刻小倉より出城に持候福山と申城明退候幸の儀に候間これを付城に御取拵候て御持可被成とて備中才田と申城に被籠置候御番衆於于今は才田は内へなり候て不入候間此者共を福山に可被籠候とて被召寄被仰渡候處に手頭兩人御理に自分の儀は如何様にも任御意可申候へ共家人共引續先様へ罷越候儀難儀と可申候最前御約束の領知只今被仰渡候は、家人共をいさめ候て何分にも可致御馳走と申上候無餘儀被思召候へ共歴々御判被遣候並御座候に付兩人計に御知行被遣候儀は不被爲成候兩人は御番不罷成迄にて被差置同國松山に爲檢使被爲置候桂源右衛門に可被仰渡候とて寺畑の御陣所へ被召寄隆景御陳所に御置候て兒玉三郎右衛門國司右京兩



人御使にて去年以來松山に罷居致苦勞候然は加茂の小倉へ付城可被仰付と被思召候處に福山を明退候幸の儀に候間引續苦勞なから福山へ罷越相勤申候は、可爲御祝著の旨被仰渡候處に源右衛門承り如御意加茂へ付城被仰付候へは松山は不及檢使候何方に罷居候も同前の儀に候條上意次第と御請申上候隆景被聞召尤なる御請に候間此段輝元公へ能々申上候へと兩人の御使に被仰聞候其後福山に普請可被仰付と候て備中竹の庄に至て輝元公隆景御陣替候其後同國の有漢と申す所より御陣替候時御手廻衆被遣加茂の小倉の城へ御手遣の働被仰付候御手廻にては近年合戦無御座に付各はやり候て天正七年の四月十四日の事に候へは一圓寐も不仕夜半より打立小倉の城より三里の間を走り著申候へは敵方には此御方御陣替の通承り地下人とは小倉の城の山下へ逃築り罷居候に付各地下

人を追立小倉の城山尾頭へ乗上り候時城の者共此方の衆小勢にて跡勢もつゝき不申をよく見切悉く城を出ておろし合弓鐵砲にて打立申候各は所の地形不案内敵は案内能存し候に付うね谷を廻り差詰く打取候に付不相叶及敗軍候此方より被遣候頭分の衆粟屋與十郎には井上源右衛門山縣三郎兵衛此外一所の衆御付被成候神田惣四郎には岡惣右衛門三輪加賀新屋又右衛門兒玉小四郎には櫻井與次郎いづれも一所衆數人御付候粟屋與十郎一番に取て返し敵數人鎧にて突伏せ討死候御付なされ候井上源右衛門山縣三郎兵衛一所の士大田垣いづれも返し合せ能働き討死仕候粟屋彌四郎兒玉與七郎施本二郎左衛門名字如不置申候置小畑助九郎孰れも手頭粟屋孫二郎に付候てよく凌き退き申候小倉の城より二里有之福山の下り口一入難儀に候時一所の者共家來の者百人計さきたちて引退候處に

四人の者は跡に残り孫次郎に心添仕手負草臥候て引兼候者を引懸退申候中にも小田助九郎は兒玉元兼一所の士山田小太郎と申者を肩に引懸退申候處に神田惣四郎ゆかた染の帷子に白手巾にて鉢巻を仕り返し合働さ申候へ共數箇所手負退候儀不相成候時粟屋孫二郎乗替の馬に抱き乗せ難所を引退申候此節も右の小田手負を肩に懸なから追付候て心添仕候粟屋孫二郎事惣四郎をつれ退候段翌日輝元公被聞召御感狀被下候其御文に曰

昨日惣四郎事手負候處に其方馬にのせ難儀を遁候由太刀高名よりも神妙之至に候我等も令祝著候

と被遊候て被遣候兒玉小四郎も人數百計にて高き所に馬を乗上られ名乗懸防かれ候に付敗軍の味方衆漸々に引退候後は小四郎も敵入替く働候に付自分數箇所被疵被及難儀候へ共能者共付添罷居

馬の口取に至る迄慥に付居候に付馬に抱き乗せ罷退候井上七郎兵衛後相摸細々返し合せ能矢とも仕敵を數人射伏申候岡惣右衛門も高き所へ馬を乗上見合候て逃退候者共をくり退け申候三澤家人野尻藏人と申者も一兩度返し合せ手柄仕候河原六郎右衛門と申候者は引退候敵に付送り馬武者一騎討取高名仕候討死の衆は粟屋與十郎兒玉與七郎名古屋與七郎井上源右衛門山縣三郎兵衛小寺右衛門轉藤右衛門齋藤佐右衛門大田垣某其外侍衆四十人に及討死仕候賀茂崩とは此時の事に候みな御附の衆は功者にて候へ共頭衆孰れも若き衆にて異見も不承我意地増に馬をはやめ參り候に付無是非小倉の城下迄三里の間を只走りにはしり敵合の時は各草臥候て此敗軍に及候此軍以後伊賀左衛門事いか様の儀御座候哉直家より左衛門家老河原四郎右衛門と申者に色々計策候故四郎右衛門請合候て

馬の血出し仕候とて主の左衛門を四郎右衛門呼候て振廻申候其時毒飼仕翌日相果申候左衛門子をは與三郎と申候此左衛門事は明石飛驒驛にて候飛驒守儀は直家の家老にて候へ共此御方へ御馳走の志御座候に付上月落去の後直家より元春隆景へ御振廻の案内申候兩川殿も可有御出と被仰候處に右の飛驒守方より弟の勘四郎を使に越候て直家御振舞申候儀御馳走にては無之候呼込候て打果し可申覺悟に候と御内意申候に付兩川殿早速御退陣被成候舅の志を以て左衛門も此御方へ御馳走の心底にて候哉と推察仕事に候扱又福山の城は敵地の方より差出續きたる山にて候其上此方より渡りむつかしき小川御座候彼是以不可然候とて川より此方に勝山と申山に城被仰付候て桂源右衛門赤川二郎左衛門岡惣左衛門被籠置候又備中三村家の侍に竹野井惣左衛門と申者をも被差添候此衆五月三

日に勝山に籠り候輝元公隆景は五月五日に松山へ御打納被成候元春は作州寺畑より伯州へ御越被遊候事

伯州長郷田合戦之事

一天正七年の秋吉川元春は伯州八橋より藝州新庄へ御歸陣候處に浮田直家二萬餘の人数にて作州へ打出又荒神山の城取拵へ祝山掛形を可攻催しの通注進有之に付即時八千餘の人数を卒ひ同八月二日美作表へ赴きたまふ處に直家事美作を引拂ひ岡山へ歸陣の由告來るに付四十曲より引返し雲州富田へ立寄伯州表の様體聞給ふに南條兄弟逆意已に露顯候に付同月九日元春元氏經言御父子三人其勢八千餘人富田を打立東伯州羽衣石の麓稻薙被仰付夫より八橋に著給へは由良の城主一條市助城を捨て羽衣石へ逃入候左候に付由良の城へは杉原播磨守と木梨中務を被籠置候同十五日に元春御父子

三人茶磨山へ陣を移されければ先陣の杉原盛重嫡男彌八郎次男又四郎并に相備の宍道五郎兵衛政慶其勢二千五百餘にて長郷田表へ打出民屋を放火し作毛を薙捨候かゝる處に南條備前守嫡男九郎左衛門二千餘にて出向ふ是を見て因州の住人武田源藏五百計にて二陣に備を立る南條元續家老共に相談仕けるは元春自將として發向の由左あるに於ては人數一萬五千か二萬あるへし此方の人數は加勢を添て三千四五百ならては無之なましいに合戦をいとみ敵に利を付へきより堅固に籠城して信長の後詰を待へしいかゝと云ければみな尤も同意候處に南條九郎左衛門申けるは元春なればとて鬼神にて有まし定て杉原此度も先陣たるへし己か勇氣に誇り後陣を不待付長郷田川を可渡所を半途を打て河水に追込可討取先陣敗軍せはいかに元春成共力をうしなひ一戦成間敷若又旗本を以て二

の軍せられは所希なれば十死一生の合戦をすへし盛重人數積りより多勢にて難叶おほへは輕々と引退山上に備て待請盛重一手を追散し其儘引入て城を堅固に守るへし毛利家に對し逆意を企る程にて一戦もならずして山下を放火せられ城中にふるひ居ては無是非次第也今日は手痛く一合戦いたす處なり我とおもう者は同心せよとて座席を立て馬に打乗侍百餘人召連て出るに付元續家人とも我も我もと付隨ひ皆長郷田表へ出る盛重父子三人并宍道政慶一手馳向長瀬川を隔て鐵砲迫合仕る中にも宍道家來寺本市佑と云精兵の毛利真先に進て散々に射立ければ敵已に引色に見ゆる其時盛重兼て川を渡し一戦可仕と存に付人數を三手に分瀬を渡る約を定め置に付馬上に團を持て敵引と見たり急ぎ渡せと下知仕ければ上の瀬は宍道中の瀬は盛重父子三人下の瀬は吉田肥前守河口刑部川水へ

馬を打入々々渡して南條勢へ懸る既に敵引色になれば南條九郎左衛門馬を乗廻し敵は小勢なり然かも後陣の勢も不續懸つて一戦せよと下知しぬれども盛重人數三つの瀬を一時に渡し懸候勢ひ強に付こらへすして引退父の元續存し候は九郎左衛門無理なる働仕候間多分討死すへきとて廣瀬若狹を呼て九郎左衛門事今日のはたらし無理なれば討死すへし其方行て異見仕引取らせよとて遣しける若狹守馳行て見れば味方不及一戦引退に付口惜と存し候哉只一騎乗廻し下知しけれ共引立たる人數なれば耳にも不聞入候故廣瀬若狹守と名乗て蹈留る吉川殿家中大草神右衛門走り來て若狹守高股を切て落せは馬より真逆に落けれ共さすか大剛の士なれば伏なから太刀にて神右衛門脚を拂ふ神右衛門膝を薙れて倒れ杉原家人安原民部と云者若狹を討て首を取る先陣見崩に敗軍しければ後陣の

武田も引退南條人數川添のかけ路へ逃懸りこゝかしこに追詰られて討るゝ者數十人有之南條九郎左衛門は能所にて引返し一戦可仕と存すれ共亂れ立たる味方なれば下知すれども聞も不入逃散に付今は無力討死と相極め羽衣石の麓柵を結たる所にて蹈留り杉原家中久津磨市佑馳來るに渡し合せ迫合終に市佑に討れたり吉川殿衆小坂二郎兵衛は刀にて追懸る處に敵鍵にて取て返し候を小坂鍵をかつき上げ切伏首を取る境七郎左衛門朝枝新兵衛三刀屋郎等羽倉右吉杉原家中菊池肥前進孫二郎佐田彦四郎小鼠各分捕仕候吉川又次郎經言の家來共今日の合戦に不逢事を口惜く存し羽衣石の固屋を焼拂ふへしとて行ける處に一條市助家來共打て出けるを城内へ追込數人討取て歸る味方には井下源七郎小谷四郎次郎討死仕候爰に杉原盛重家來菊池肥前守嫡子左近は十三歳より分捕仕候高名數

箇度に及び候傍輩共の取沙汰に左近手柄は父肥前守させ申候敵を突伏せ候ては左近に首を取せ候と申を左近承り口惜き取沙汰と存し此度は父と一所に不罷居佐田小鼠と申合一所に懸て南條家人一條新五郎と鍵を合せ新五郎を突伏せ首を取り内の者に持せ歸候道にて日來悪口申候安原式部入江大藏助に行逢候時安原申掛候はいかに菊池殿今日の御手柄は無之候哉と詞を掛る左近聞て内の者に持せ候首を兩人の前へ投出し一條新五郎と名乗て懸候武者を突伏せ首を取候證人は佐田小鼠なり父に付廻り申さね共高名は仕る也と云は兩人は言葉もなくて別れ候なりさて今日の一戦に討取首數百五十餘級御本陣へ被送候處元春御機嫌克盛重の御事如右之御働不珍候へ共御手柄不淺候とて御褒美被成候事

備中國忍山之城被責事

一浮田直家は於作州數箇所の城責とられ數百の味方を打せ無念に被存忍山の城に浮田信濃守岡強助を籠置毛利家の番城にせられ此御方の様體承り候様にと被申付候此段被聞召早々忍山を可被責とて天正七年十一月輝元公吉田御出馬被成吉川元春御父子四人小早川隆景御供候惣勢二萬の御著到にて備中へ御出張被遊無日に忍山へ可被押懸と有之處に忍山の番主浮田信濃守岡強助一千餘の人數を卒し打出ければ吉川經言願ふ所なりと悦ひ出向ひ鐵砲少々打せ其儘馬を入たまへは信濃守強助も經言を見知能相手なりと存し味方を諫て防戦仕る此方にも兩大將を目に掛突立ければ終に城兵利を失ひ引退然處に經言一手の者其夜忍山の城へ忍入木屋に火を放つ因茲經言一手先に責込輝元公の御本陣小早川殿衆も我意地増に乗入候に付兩大將共に討死する城兵を討取其數五百餘なり殘兵

は夜中なれば皆欠落仕候事

羽衣石向城被築事并宇津葺之事

一天正七年の秋吉川元春父子伯州へ出馬有之南條元續居城羽衣石の向城を築せらるゝ高野宮の城には山田出雲守松崎の城には森和泉守條山には岡本藏人田根兵部被籠置候又小嶋元清居城岩倉の向城には宇津葺に二宮木工羽根兵庫牛尾大炊助北谷刑部嶋田の城には正壽院利安小嶋四郎籠置たまひ元春父子は藝州へ打入給ふ處に南條伯耆守元續小嶋左衛門元清三千餘人引卒し不意に宇津葺へ押よせ稠敷攻申候城中より羽根牛尾北谷檢使に籠られ候二宮木工助突て出散々に射たてければ敵早速引退牛尾大炊助宇山善四郎引敵へ付送候處に南條郎等一條猪之助と云者取て返し牛尾に渡し合せたかひに鍵にて迫合候處に卯山馳來て一條か胸板を突ければ鍵強く

當り下なる川へ突落し候定て水に溺て可死と存し候處に猪之助游き上りいかに牛尾殿先刻の鍵勝負を不付無念に存と云て牛尾卯山兩人と火出るはかり迫合勞れて牛尾卯山に討れ候なり扱又城中の者共申候は南條事一戦に打負無念に存し急に又仕懸け候事も可有之候とて城山の麓に柵を付候處に南條家中侍大將仕候赤木兵部大輔嫡子大力と申す者責馬仕候此馬口の強き馬にて蒐破り引共廻せともとまらずして柵を結ひ候者共の中へ來り候を數人をり相討果し候城兵寄相て南條と初ての合戦に得勝利あまつさへ如此の儀共軍神の加護なりと悦び申候也

伯州岩倉之城下伏兵之事

一伯耆國岩倉の城には小嶋左衛門尉元清罷居此御方へ逆意に付其向城に島田の城を取立吉川殿家來鈴川二郎左衛門小嶋四郎次郎北谷

正壽院利安被籠置候處に岩倉の城より毎日打廻りの足輕を出し折は南條自身罷出候此様子を承り吉川殿家來今田中書伊志源二郎など申合都合四百餘人大宮と申す所三箇所に伏兵を置森脇市正を  
は高き山へ上げて敵伏兵に乗らば貝を吹へき由相圖を定め城中より足輕を出して偽り引ければ如案岩倉の城より二百計人數出て足輕を追立る城兵伏兵へ乗懸る時森脇市正相圖の貝を吹とも如何したる事にや貝鳴らす候故伏を起し申事延引仕候内小嶋元清今日は足輕迫合の様體何とやらん無心元として自身五百餘の人數を卒して罷出候此方の衆は麓の森の中に伏兵を置いて居候處に食の付たる反古のありけるを敵見付不審して取上げ是は新庄衆の書狀なり伏兵あるへしとて鐵砲を揃へ打立るに付伏て居候事不相成皆起立て逃退く敵は勝に乗て追掛既に及難儀候處に今田中書例の大弓に大馬

股打つかひて先懸の者四五人射伏候中書も矢種射盡して漸く矢三筋残りけるをつかひて弓引しはり切て放つ其矢石に中て火出矢の筈碎て飛ければ敵共恐て退く爰に小嶋元清家人細田源之允と申者岩の陰にかくれ居中書つかひたる矢を放つに於ては即時走り懸り中書を可討と待居候今田も此様體を見届能ねらゐて射ければ細田肩先を射貫候就夫細田を肩にかけて逃退中書側に粟屋市佑居けるに付今田中書仕りたると覺へ候と高聲に詞をかくる又中書矢をつかひ能者を撰ひ可射伏と待處に流矢來て中書頭に中る矢をはかなくり捨けれ共弓を引へき様もなければ下人の肩に掛りて退く今田手負て退候への敵は競ひ懸りて追掛る粟屋市佑市川雅樂丞家來長嶺彦兵衛兩人踏留る南條方の安部太郎左衛門と名乗鍵にて突て懸る兩人は太刀にて迫合候へ共味方は皆逃退き敵は打續て追來るに



付兩人阿部をまくり付け其隙に急に引退く粟屋源藏笠井作之允取て返し敵數人突伏て兩人共に討死する朝枝與三太郎は遙に引取れ共兇源藏討れたると聞て返す粟屋新三郎も一時に返し合せ戦ひける處に與三太郎は阿部太郎左衛門自身打ける鐵砲に中りて死す新三郎は敵數多切伏討死する森脇大藏助市川雅樂允佐々木豊前内藤平左衛門返し合返し合敵を突伏せ能凌き退候に付敵も不追して城中へ引入也

牛尾大藏左衛門鳥取之城被籠事

一山名大藏太輔豊國事羽柴秀吉發向の刻家老共を呼集め秀吉に降參し家を續へき哉と談合せられ候處に森下出羽守中村對馬守承り秀吉の武威強く大兵にては候へ共先年元就雲州發向の砌毛利家へ屬し可申旨以使者被仰理其後山中鹿之助等尼子勝久を取立大將とし

て當國へ打入候節忽ち毛利家一味の好みをひるかへし彼に一味し給ひ又其後吉川小早川勝久退治すへしとて當國私部の城へ發向の由聞へければ尼子同心の誓約を違變し毛利家御隨屬有之今更又秀吉へ御一味の儀武將たる人の有間敷儀共誠に口惜き御事なりと申ければ豊國尤と存し秀吉へ同心なかりし處に豊國娘を張付木に上せて鳥取の麓に懸置秀吉より城中へ使を遣し娘の命も惜く又因幡一國も望ならば能々分別せられよと申されければ豊國此上は不及是非とて御味方に可參の由使者を以て秀吉の陣所へ申遣ければ秀吉領掌にて因州の内二郡豊國に被宛行候也因茲森下中村等豊國に心をはなし表裏胡亂なる大將の家人と世上に唱へらるへきも無是非とて藝州へ御味方可仕の通申上因幡一國を切隨へ本領を取返し可申と覺悟仕に付豊國事鳥取を逃去て播州姫路に上り家臣共逆意

仕に付浪人の體に罷成候御威光を以本知安堵仕度候旨秀吉へ申理り候かくて豊國鳥取を逃去ければ森下中村方より元春へ使者を以各儀御味方に罷成御馳走可申上候いつれにても城督一人被差越候様にと申上候に付方角の儀に候間同國わかさの鬼か城に被爲置候牛尾大藏左衛門鳥取へ可參の由被仰渡候則牛尾儀鳥取へ罷越敵地へ相働く處を放火仕一揆共退治仕候然は豊國領分諸寄と申城に磯部と申者籠り罷居候城中に野心の者出來牛尾方へ内通仕に付牛尾事森下中村など申談し一千餘にて彼地へ押懸切岸の際迄攻付ければ城にも能者數多罷居申に付弓鐵砲にて透間なく射拂ひ候へ共牛尾手人數三百計にて急に攻込取出の曲輪乗取候續て二の曲輪へ乗込候處に城兵稠敷防戦仕牛尾侍共數人討死仕牛尾自身扉に手を懸乘上り候處を弓にて膝の節を籠深に射られ無是非人に懸りて退候

刻扇を抜て懸れくくと下知仕けれ共大將手負けければ諸卒皆引退候其手口甚敷痛み申に付て元春へ申理り爲湯治雲州牛尾へ罷かへり候就夫市川雅樂允を代りに被遣候事

輝元公作州御出馬之事

一天正八年の秋浮田直家因幡の者共内通候て風と作州へ被致出馬此御方より御人數被籠置候小城二箇所攻落し夫より小川右衛門兵衛湯原豊前守鹽屋豊後守福田など被籠置候城へ取懸り攻詰る殊に城中に逆意の者有之に付既に落去に及ひ候處を右衛門兵衛豊前守豊後守身命を捨相働き逆意の者共追出し二三の丸堅固に持堅め早速兒玉善右衛門を使にて様子委細に申上候就夫輝元公同年九月三日吉田御出馬被遊伊多岐に至て御著陣翌日山中へ御陣取被遊候隆景は阿佐井へ御出馬夫より成羽に御滞留被成輝元公御著を御待被成

候元春には因州鳥羽へ御加勢籠させられ其上南條逆意に付羽衣石岩倉の城へ付城被仰付候彼是に御隙入御遅著被成候其後御三家被仰談作州御發向被遊候へは敵は頓に悉く退散仕に付御抱の城々へ兵糧御籠させ被成御仕置被仰付候て御歸陣被遊候此時右三人の者共へ輝元公御書被遣候其御文に曰

至當城備前衆差詰之城中敵同意候て既に及落去候處に兩三人無二之覺悟を以二三之丸相拘之剩敵心之者立出福田事も堅固之由誠に肝要に候併悉皆兩三人短息之故に候更無比類候此方之儀昨日至伊多岐出張候今日著陣候追々令陣替即時可及行儀定候其段可心易候此時可得大利と本望之至に候彌堅固之調儀專一候猶期來喜候謹言

九月四日

輝元判

湯原豊前守殿

鹽屋豊後守殿

小川右衛門兵衛殿

右三箇所之城の名舊記に無之候ためて右三人衆子孫には覺書可有之候

因州鹿野城扱之事

一天正八年の夏羽柴秀吉五萬餘の人数を卒し因幡の國へ出張し鹿野の城を取巻被責候當城の番頭として三吉三郎左衛門新藤豊後被差置候此外には盛重家老横山と申者吉川殿よりは森脇内藏丞佐々木善兵衛被籠置候此城には山名豊國の人質并家老共の人質被籠置候に付秀吉より扱を入右の人質不殘渡し候へ左あるに於ては城兵の儀雜人に至る迄一命を助け下城させ可申の通被申候に付各任其意

人質を渡し城兵無恙罷歸り候處に元春被聞召肝要の地に被爲置候者不届の儀不及是非と御意にて不殘切腹被仰付候事

備前蜂濱合戦之事

一浮田與太郎大將にて人數七千餘引卒し備中へ發向仕猿懸矢掛まで燒働仕候節此御方の衆出相八幡馬場に於て迫相申候時兒玉小四郎名譽の鍵を被致候其後此方よりは穂井田元清御大將にて御出なされ與太郎事備前兒島へ働き申に付同所蜂濱にて合戦御座候有地美作守組討の高名仕候其様子は敵一人ゆかた染の帷子を著し鍵にて懸り候美作守見申候へは内々存したる相撲の上手にて候故組合申候は、成間敷と存し候内にはや鍵を合せ候美作は長刀にて二つ三つ打合候處に件の男透間なく鍵を捨組申候案の如く美作を即時組伏候へ共作州事能家來共召連候に付敵を後へ引伏美作に首をとら

せ候有地家來有地右近は其場に於て別の敵に渡り合討死仕候古志事も鍵を合せ首を取高名仕候左候て敵味方共に懸引の働き仕候處に富落組の足輕五郎兵衛と申者茂りたる林の中に罷居與太郎采配にて下知仕候處を檜の木をすり臺に仕り打申候へは只中へあたり馬上より打落し候元清御家來水川と申者首を取候大將討死仕候故敵敗軍仕候に付て追討に數百人打取被得御勝利候件の足輕には檜木と名字を被下侍に被仰付候也仍如件

吉田物語附尾上卷終

吉田物語附尾中卷

吉川式部少輔鳥取籠城之事並羽柴秀吉鳥取城被圍事並吉岡城之事

一天正九年春森下出羽守入道道與中村對馬守方より新莊へ飛脚を差越申上候はいつれなり共御同名之衆御越被成候は、大將と仰き申度之通願ひ候此飛脚二月廿二日著仕候元春様被聞召御吟味之上吉川式部少經家を召て其方儀因州鳥取へ被遣度被思召候大儀なから相勤候は、可爲御祝著之旨被仰渡候式部少御意承り御心入有難奉存候何方にても御用に立申候儀は同前に候敵地の境肝要なる所へ被遣候段忝奉存候堅固に御用に立可申之通御請申上候へは重疊御祝著之旨被仰聞御附之衆には松岡安右衛門森脇若狹守山縣筑後守同源右衛門朝枝加賀守武永四郎兵衛井下新兵衛井尻又右衛門高助

左衛門大草因幡守長和三郎左衛門長岡信濃守野田左衛門船手よりは野村藤藏同九郎左衛門其外國衆被差添都合人數八百餘にて頓て新莊を出足仕候時しけふちにいはせたる頸桶を備之先へ持せ候誠に討死の覺悟なりとて諸人譽申候又鳥取より一里計にて丸山と云城有之是へは山縣九左衛門を城督に被遣候國衆には奈佐日本介鹽治周防守佐々木三郎左衛門以下五百人籠り申候輕の湊には大船數多かけ置警固仕候式部少入城候て頓て城中を廻り見申候處に兵糧藏に米纔御座候に付相尋申候へは先月若州より米買船參り候て高直に買取申に付頓て出來仕る米にて候へは少々かこひ置候米をも賣申候通森下など返答仕候式部少立腹仕籠城之人數沙汰させ申候へは雜兵男女共に四千餘有之僅か一兩月の養にも不足に候へは早速兵糧籠られ候やうにと注進仕る殊に上方に付置候山伏此節罷下

羽柴秀吉へ信長被仰候は當秋は因州鳥取之城攻取候へとの儀に候秀吉御請に定て元春後詰可仕候小勢にては難叶可有之と被申候へは人數一萬可被加之由仰候通風聞仕候由候秀吉出張必然之儀に候鳥取は名城と申究竟の士二千に及籠居候間兵糧さへ續き申候は、容易落城仕間敷候通申上候へは元春被聞召兵糧少成共被籠度思召杉原盛重方へ才覺仕候様にと被仰遣候に付少は籠申候へ共四千餘人の飯米に候故一箇月の糧も無之候船にて御籠可被成とて田中惣右衛門豊島源次郎有間又八白井藤四郎同新左衛門同七郎左衛門竹内新右衛門手島藤次郎此者共を警固として大船四艘に米を積乘廻し候處に丹後の警固船百艘計夜中に押掛候存しかけも無之候故防戦仕候へは夜中と申不相叶悉く討死候竹内新右衛門白井七郎左衛門兩人漸く切抜罷歸候然處に同七月五日羽柴美濃守一萬計の人數

にて山見として打出丸山の東の山へ打上頓て引取候時奈佐日本介  
 甥瀧三左衛門など付送り遠矢少々射掛候同七日卯之刻羽柴筑前守  
 六萬の軍勢を卒し鳥取丸山兩城を一所に打圍み秀吉本陣は摩仁帝  
 釋山に居られ西の方には中村孫平次少阿彌山名大藏大輔木下備中  
 守荒木平太夫神子田半右衛門蜂須賀彦右衛門小寺官兵衛木村隼人  
 佐加藤作内東方には信長より加勢の人數一萬餘人金山には織田於  
 萬宮部善乗坊備前よりの援兵明石飛驒守長船紀伊守福田五郎左衛  
 門榎原監物浮田七郎兵衛岡越前守總て八千餘人打續て陣を取る又  
 後詰の押には秋里村に城を築き相原七郎左衛門を大將として一萬  
 の人數を以て渡口を押へさせらるゝ海上は淺野彌兵衛を大將にて  
 軍船三百餘艘掛並へ警固させらるゝ丸山の東の方に羽柴美濃守秀  
 長増屋隱岐守山名但馬守北の方には垣屋駿河守磯邊秦龜井武田篔

部以下透間もなく陣取り陣屋の前に芝土手を高く築き其上に柵を  
 二重結廻し堀をほり壁を付け矢間を切り夜は二間に一つ宛挑燈を  
 掛置候城より足輕を出し偽引候へ共一圓出合申間敷の由堅く被申  
 付候故出合候者一人も無之候陣中より鐵砲を打計なり城と敵陣の  
 間に袋川と云大川あり渡事難成に付城兵出て働く事不成數日を送  
 る彌兵糧無之に付藝州へ此段注進可仕とて水練の達者を撰ひ袋川  
 千谷川をくゝらせ候處に敵方に見付候て河水に網を張其端に鳴子  
 を付番勢とも罷居使之者五人迄搦取刎首候秀吉出張の到來未だ無  
 之候内元春より有地右近新見左右衛門兩人に被仰付兵糧御入させ  
 被成候兩人大峯迄罷越し夫より敵陣三十餘丁近所へ參り透間を見  
 合候へ共敵陣の構一向手に及ぶ事にて無之候故三日滯留仕り候へ  
 共敵も敢て不取合候此儘にて日數を送り候ても無詮候又討死可仕

所にても無之候に付無是非兩人罷歸候城には糶米彌盡候て雜人と  
も山の尾へ出草木の葉を取候處に秀吉の本陣より是を見付敵百人  
計出候て追立雜人少々打取候就夫因幡の住人尾崎と申候者翌日待  
伏仕り又雜人を草木の葉取に出し候案の如く敵二百計打出山の尾  
へ上り候尾崎能き所へ引請伏を起し候へは一戦も不仕逃散候に付  
尾崎追掛候處に敵田の畔に鐵砲を持せ待居候夢にも不存行掛可仕  
様も無之候故胸をたゝき爰を打てと申てつゝ立て居候敵鐵砲下手  
にて打はつし候に付走り掛り即時切伏せ首を取罷歸候其後蜂須賀  
彦右衛門手より人數を差出し川に添て大物見を仕候輝元公より御  
加勢として被籠置候渡邊太郎左衛門を式部招き申候は此間果敢々  
々敷迫合さへなく城兵疲れ候幸ひ能所へ敵出候間足輕召連罷出花  
々しき働を仕目を醒させ候へと申聞せ候元政申候は老木に花咲せ

よどの仰せ一入忝存候心の花をも今日散して可掛御目と申候て足  
輕三十すくりて召連罷出候中村又右衛門と申候者日頃兄弟同前に  
申合候に付式部へ達て相斷り太郎左衛門に相添罷出候各眞一文字  
に敵を目に掛け進み候處に中途に長き畔あり其陰より伏兵立起り  
跡先より打候太郎左衛門渡合敵一人打伏せ首を取り立上る處を敵  
大勢取巻終に討死仕候又右衛門儀も敵と組差違て一所に討死仕る  
足輕の内大津木權兵衛と申者敵打捕切抜本陣へ罷歸候足輕三十人  
の内二十五人は討死仕るなり又湖水の向ひに吉岡の城とて小城有  
之城主は吉岡入道質休嫡子吉岡安藝守次男右近父子三人なり小身  
なれば僅三百計の人數にて籠居無二此御方の御味方仕敵の大兵に  
も不恐節敵陣へ忍ひを入油斷をうかゝ候或夜又敵陣へ忍を入  
數十人打取其上多賀文藏と云者の指物を取候秀吉被聞付ちいさき



城なれば誰にても罷越踏破れと被申付候文藏罷出願くは拙者を被遣候様にと訴訟仕る就夫人數三千文藏に被差副被遣候時此馬印を持候へとて瓢覃の馬印を被渡候是は秀吉の馬印なり文藏三千餘の士卒を引卒し瓢覃の馬印を船の舳先に押立湖水を渡り船をは跡勢渡海の爲漕戻させ鐵砲百挺計先へ備へ城の矢閒射閉させ其跡を七百餘の人數先勢にて鍵長刀太刀にて攻寄候吉岡安藝守弟右近兩人是を見て城戸を開かせ突て出る處に父質休今は時分早し我等見合すへしとて矢倉に上り敵の様體を見る態と鐵砲を打せされは敵共安々と壁足につく其時質休時分よしとて采配を振れば弓鐵砲射掛安藝守兄弟城戸を開かせ突て出る敵周章騒く處を二十餘人突伏せければ先掛の者共不叶して引退く二陣の文藏二百餘人掛合相戦引退たる寄手も取て返し相戦是を見て城兵一人も不殘打て出る文藏

も踏留り戦ひけれ共終に負て引退く城兵勝に乗て追掛首を取る敵共堪かねて湖水へ飛込溺死する者多し就中吉岡右近は瓢覃の馬印持たる者を打取ければ秀吉大に立腹にて湖水の汀を駆廻り給へ共數町を隔てたる事なれば其かひなし吉岡安藝守岩の上に上り水練を入て溺死の者をつかせ七百餘首を取て湖水の汀に掛させ瓢覃の馬印を立置頃天下無雙の弓取羽柴筑前守を打取たりと高聲によはり其證據には馬印を見よといへは寄手の大將多賀文藏手負て岩の陰に隠れ居て此由を聞て漸く□出某は當城に向ひたる大將多賀文藏なり馬印某に給り候に付持せ候全く秀吉打死にてはなし我等事深手負たれば働く事不叶早く首取れといへは大將なりと知て首を取り関□を揚る文藏頸其外有名者の首三十餘級并瓢覃の馬印寄手捨たる鍵長刀を元長へ進上申候扱又秀吉は文藏を打せ馬印を

□は文  
字不明

取られ大に噺り羽柴七郎左衛門龜井武藏守に人數三千付て早速城を可乗取とて被渡の處に城兵以前の如く相防ぎ寄手を追崩し能き士十七人打取候兩將も危き命を助かり引退無詮所にて人數を失ひてもよしなしと秀吉分別を替られ其後は城攻不被申候に付鳥取落去以後羽柴七郎左衛門扱にて城を渡し吉岡父子三人伯州へ罷歸り候扱又羽柴美濃守殿藤堂與右衛門を呼其方如何存候哉鳥取丸山の兩城糧米無之迷惑可仕候最早扱を入可然候如何様にも計らひ城主の心を見よと被申付ければ與右衛門御尤に奉存候とて阿字戒源太兵衛を使として丸山の城へ遣し當城の儀無異儀被明渡候に於ては各の儀は不及申雜兵に至る迄無恙至伯州送り届可申候尤人質を取替し御氣遣無之様に可仕候と申入候處に元春御家來境與三右衛門森脇次郎兵衛兩人罷出藤堂殿御使者城内へ御入被成候へ城主山縣

九左衛門直に御口上承り御返答可申と言ければ阿字戒も大事に存し色々辭退仕候へ共是非内へ御入候へ無左候へは御返答不相成と申に付不及力門より内へ入申候を與三右衛門無手と組候森脇抱付兩人仕り搦取切岸へ引出候藤堂殿へ御返事可申と呼はりければ敵陣より人數多出て鳴を静め聞候其時境與三右衛門高聲に藤堂殿御使者口上の趣具さに承居候御返答阿字戒殿へ委細申合候爲御禮御使者を一體分身となし返し候と云て首を刎切岸より下へ投落しければ敵是を見て腹を立さるに於ては一人も不殘打果せとて仕寄をよせ候藤堂與右衛門井合次郎左衛門など夜廻りを仕候然處に境與三右衛門待請居候て與右衛門を鍵にて突申候深手にて候へ共命は無別條候又或時狼一匹丸山の中程へ出候を寄手鐵砲を揃へ打候へ共元の林中へ逃込候に付美濃守殿より以使城中へ申され候は當山

に狼一匹籠居候御人數を被出候へかし此方よりも人數を出し長陣の眠さまし狼狩申付互に見物可仕と被申越候山縣九左衛門承り候とて即時人數を出し狼を打殺し敵陣へ送りければ美濃守殿機嫌にて狼を二つに切頭をは留置尾の方を此方へ被差越候次手に美酒十樽折十合贈られ候城よりも爲返禮鐵砲玉藥折に積て贈り候なり右に記す境與三左衛門森脇次郎兵衛兩人は丸山の城普請見合の爲め被差越候處に急に取巻れ候て歸候儀不相成籠城仕候事

吉川式部少輔以下切腹之事

一同年十月二十日羽柴秀吉より堀尾茂助を使として吉川式部少へ被申越候は去七月以來互に諸卒を勞し徒らに數日を送り候然は令和陸藝州衆の儀は式部少殿を初め雜兵に至る迄一人も不殘送り届可申候森下中村佐々木鹽屋など儀は山名普代の家臣として己か立身

鹽屋は  
國治

の爲主人を追出仕る事前代不聞の不忠人なり又奈佐日本助は海賊の張本にて往來の船を切取諸人を惱す大悪人にて候へは此者共には切腹申付見懲しに可仕との口上にて候城よりは野田左衛門小野太郎右衛門罷出口上承届式部少に申聞せければ經家口上の趣を聞て得と思案し我等事大將の號を受當城に籠り諸士の命を司り國方の森下中村などを見殺し甲斐なき命を助かり争てか本國へ可歸哉とて返答には被仰越候趣承届候拙者一人切腹可仕候間諸卒の命を被助に於ては可爲本望とて堀尾を被差返候其後又堀尾茂助を秀吉被差越御自分切腹被仕候は、殘る藝州衆無異儀送届可申候此段誓紙を以堅約可仕候間判形の筆元見られ候仁可被差越候と被申候式部少聞て御誓紙御判形爲見届一人可差出の通得其意存候御誓紙被下候上檢使被差越候は、切腹可仕の由返事仕候就夫以前の使野田

左衛門小野太郎右衛門秀吉本陣へ罷出候へは即ち秀吉誓紙判形被調候兩人筆元見届誓紙請取罷歸式部少に渡候處に爲檢使堀尾被差越候式部少事在所出足仕候刻酒樽一荷持せ申候其酒たしなみ置取出させ御付被成候侍衆其外暇乞の盃を廻し事終て後衣裳を改め羽織著仕り表へ出て茂助に相對致し時の挨拶など仕り具足櫃に腰をかけ我等首は信長の實驗に入へきなれば能打と申て一尺五寸の脇差中巻仕たるを脇に押立聲をかけ引廻し又取直し心下に押立て臍下へ押下し脇差を持たなから膝の上に兩手を突て首を伸る靜間と申者介錯仕り候然處に福光小三郎與力の士若鶴甚右衛門殉死仕候通檢使に向ひ申理り切腹仕る森下出羽守入道道與中村對馬守も同席にて切腹仕候に付五人の首を請取堀尾本陣へ罷歸候丸山にて奈佐日本助鹽治周防守佐々木三郎左衛門切腹する秀吉各の首共實驗

有て頓て安土へ送らるゝ其後下城の人数見物のため一柳陣所尾崎の矢倉へ秀吉出らるゝ袋川には橋をかけ左右に番を置いて蕪州の者共并に森下中村其外切腹仕候者共の妻子を渡され候又道の傍に大釜をすへ並へ粥を煮させ下城の者に喰せられ候多食仕候者は皆相果候國方の者共をは望に任せ其通にても被差置候總人数の儀は鳥取より七里餘有之候河口刑部少居城戸間利迄送り届させ被申候事如件

輝元公御出馬并元春吉秀對陣之事

一天正九年十月中旬因州鳥取城爲後詰輝元公吉田を御出馬被遊雲州富田へ御著陣候御先手は吉川元春御父子御四人天野中務少元明毛利大藏大輔元康國衆には熊谷豊前守益田越中守三刀屋彈正等都合御人数三千なり元春様此度御小人数に候は因伯の御味方中より御

加勢の事申上候に付御人數被遣候に依てなり同月廿五日伯州馬之山へ元春御著陣候翌日は同國大峰へ御陣を可被寄と御議定候處に鳥取落去の到來御座候然處に秀吉一戦を遂へきとて急に伯州へ打越同月廿七日馬之山に向ひ高山に押上り馬之山を目の下に見下し數萬の大兵峯谷平等に陣取候元春御陣所馬之山は左は湖水なり後に橋津川此橋津川をやはせ川とありあり如形なる切所に候山田出雲守に被仰付橋津川の橋を切落させられ渡船其外湖水に有之候船共悉く陸へ引上櫓械を本陣へ取寄られ候左候て經言に被仰付御陣場の前敵寄の方柵を御結せ被成敵合の道二筋御作らせ候然處に當御陣所に居候國衆寄合候て元春は此所に於て有無の一戦と極られ候と見へ候杉原盛重人數をそへても六千に不足の小勢にて六萬餘の大軍と及一戦ならは當方の勝利十に一つも有間敷候今夜本陣へ爲見

舞罷出元春へ異見仕り可然哉と談合致し各同道にて本陣へ出候へは元春袴をめし御出逢候ていつもより機嫌能御咄被成色々御會釋など有之御咄の序に敵陣を各見られよ薄雪ふりて此方には面白けれども秀吉は此寒氣を凌ぎ迷惑せらるへきなどゝて餘念もなく見へ候に付終に御異見申事不成各退出候其跡にて焼火をさせられ脊をあふり近習の者共に御雜談候て被成御座候を皆見聞仕り兎角十死一生の御合戦必定の儀と存雜兵に至る迄覺悟を詰罷居候翌廿八日秀吉は南條居城へ兵糧を籠させらるゝに付敵勢段々峯を傳ひ谷へ下り見候馬之山御陣よりは半道計有之此方御陣所の前に高き堙の原御座候爰にて合戦有之へしと諸人存居候井上平右衛門山縣惣右衛門に鐵砲百挺御附被成松ヶ崎と申所へ被差出候御檢使には今田玄蕃を御附被成候鐵砲を打掛敵を偽り引候へ敵足輕を追立掛り

明口は不

來るに於ては可有御合戦と被仰付候敵二三千程押通り候に行合候へ共大雪より二三間先も難見分候に付互に扣へ居候處に五六段前なる小松原に鐵砲の音仕候如何様の事に候哉と存候處に此方の足輕に千代口與介と申候者敵の馬武者を打落し吉川家中千代口與介と申者仕り候と名乗候今田井上など敵に一鹽付首途よしとて悦ひ申候馬之山には敵出候様子粗聞え元春願ふ處なりと被仰先元長經言出られ候へ我等は秀吉旗本の備を見合可出と被仰候に付元長經言御打出被成候へは栢原盛重父子熊谷伊豆守同豊前守二千餘人にて松ヶ崎へ打て出る南條元續小賀茂等へ秀吉の陣に居候故只今備を出し候は吉川元長兄弟なり御人數被打下候は、輒く打取可申と云ければ秀長尤と同意にて先手の各へ被申渡候へは藤堂與右衛門中村式部少神子田半右衛門總井武藏守等我先にと山下へ押下さ

萬四五千計人數押續見え元長經言二千餘の人數にて打向ひ備を一面に立て待掛らるゝ然共秀吉本陣より軍使を以て少も敵合間敷の旨頻に制せらるゝに依て上方勢悉く人數を上げて引退に付此御方にも備を引入給ふ其後晝夜三日秀吉戦陣ありて此方の様體見合被申處に元春下知を以橋を切落し湖水の船共の櫓械元春本陣へ取らせ無二の御覺悟の上輝元公御出馬にて伯州津原見より雲州富田迄人數打續候へは及一戦事如何被存候哉同月廿九日高山を開陣有之因州鳥取迄被打入候に付輝元公も吉田へ被納御馬候事如件

因州大崎城荒神山等被攻取事

一元春被仰候は去冬鳥取丸山兩城秀吉に被攻取無是非次第なり即時敵方の城五三ヶ所も攻取憤りを可散儀なれども極月に成寒氣甚敷故諸卒の勞をいとひ及延引候早や年も明次第に暖氣に成るへし急

き可有御出馬とて天正十年正月十七日新庄を打立給ひ同廿五日雲州富田へ御著被成夫より二月上旬伯州八橋へ著陣し給ふ相原盛重儀病死にて嫡子彌八郎元盛弟又四郎景盛罷出先陣仕る先大崎の城を可被攻とて被打出候鳥取には木下備中守宮部善乗坊罷居但馬には神子田半右衛門尾藤在陣致し扣へ候に付此押として熊谷豊前守益田越中守三澤攝津守三刀屋彈正左衛門湯ノ佐渡守天野新兵衛都合三千人數を引分置給ふ大崎へは相原兄弟佐波越後守富永三郎左衛門尉周布名代同名十兵衛都野駿河守以下四千餘人先手として押寄る城には木下民部少其外因幡の國衆山崎村越叢部笠塚八百餘楯籠候同二月十四日曙に相原兄弟手勢一千五百にて一分の手柄を以て切捕へきと存他へ不搦取出の丸へ無二無三に乘込候家來の足立次兵衛安原民部一番を爭ひ堀へ乘續て各乘込に付城兵騒立て二之

丸へ逃入候相原付入に乘込總勢是を見て相原に先をせられ無念なりとて一騎かけに馳來て乘るに付城兵所々にて大半打死仕る木下民部をは相原家人三吉徳兵衛打取候都て首數四百六十餘級なり大崎落去の後同廿日元春御父子三人七千餘の御人數にて荒神山の城へ寄らるゝ處に其夜城を明て欠落仕るに付追掛三十餘人打取即時鳥取の山下へ押寄在家悉く放火し給へとも城兵小勢なるに付城を出て不戰候夫より吉岡の城へ取掛らるゝと雖も城中一入小勢なれば防戰不成して明退に付諸寄の城へ押掛籠る所の一揆共數百人切捨大崎迄打入給ひ鳥取を可被攻と思召候へ共名城にて候故力攻には難成此所に御滯陣候此由木下備中守方より秀吉へ飛脚を以て告ければ當夏は必備中表へ發向すへし隆景一分にては後詰成間敷候其時は元春も其邊を差捨備中へ可出馬候其内鳥取私部兩城堅固に

守るへし敵寄來るといへども城を出合戦すへからすと返答被申候に付但馬の山名宗仙鹽屋駿河守増屋隱岐守其外因但兩州の者共七千餘秀吉出張を待但州竹田邊に集り居候へ共皆居城へ歸り候なり元春御父子も伯州八橋へ打入給ひ重て人數を催し私部の城を可攻取左あるに於ては秀吉因幡へ發向無疑候秀吉と對陣は小勢にては如何可有之哉と御遠慮にて雲伯藝石の人數被催候事

本願寺門跡光佐與織田信長和睦之事

一去々年天正八年七月本願寺顯如上人へ勅使被成下候勅諭には如何様の宿意雖有之出家として武家の業を勤め門下の輩を苦しむる事不謂儀なり早く信長と令和睦家業を可勤之旨なり勅使大坂罷下り勅諭申渡候可及違背事にあらねは即ち御請被申上大坂の城を去て紀州雜賀へ移られ候信長大に悦び給ひ矢部善七郎を爲使黃金絹帛

等を光佐其外下間法印等とへ被遣候門跡よりも安土へ爲使者家老の者被差出候近衛前關白殿勸修寺中納言庭田中納言先立て到安土案内者なり太刀馬代白銀千兩絹百端被獻之雙方無事相調候就夫木津に被置候御番衆も城を明罷下り候事

羽柴秀吉備中表發向之事

一羽柴筑前守秀吉天正十年三月十五日播州姫路を出馬せられければ播摩但馬因幡の者共馳集る信長よりも加勢として五畿内の人數を被差添候に付既に其勢六萬なり浮田直家の息八郎秀家十一歳なれば伯父浮田七郎兵衛忠家を大將として戸川平右衛門明石飛驒守弟勘次郎長船紀伊守岡越前守福田五郎左衛門口原内藏丞市三郎兵衛蘆田五郎太郎小原入道新明沼木新右衛門浮田河内守富山半右衛門洲波隼人佐入道如慶宮本四郎左衛門等を先として播州二郡備前一

口は不明



國美作半國の勢都合二萬餘先陣たるに依て秀吉の軍勢八萬餘を引  
卒し備前岡山へ著陣なり如件

小早川隆景備中表仕置被仰付事

付清水長左衛門由來之事

一天正七年浮田直家信長一味の後備前の境備中の内しふくら山の麓  
に鐵床と申す山有之此山を直家より城に拵へ普請等手堅く申付人  
數を籠置候に付此御方より宮地山と申山に向城御築被成乃美少輔  
十郎を大將にて御人數被差籠候敵城の間に小河御座候中間は二十  
町計有之宮地山の良に一里餘候て忍山と申山に城を築き浮田信濃  
守同孫介を直家被籠置候處に天正九年九月隆景御一分にて被取掛  
御攻候岡山より爲後詰人數罷出候へ共矢居へも不得來候故城兵不  
相叶十一月末に兩將切腹仕致落去候に付此忍山を是日より御持せ

可被成とて桂左衛門太夫岡惣左衛門を頭に被仰付加番數多御籠被  
成候忍山の上に鎌倉山と申す山御座候聲届にて忍山を見下申に付  
鎌倉山を城に御拵候て桂源右衛門野山宮内を手頭に被成御人數籠  
られ候此野山は備中衆なり一城を持たる士に候又鐵床山の敵城よ  
り一里の内に高松の城有之高松より一里の内に賀茂の城とて平城  
あり本丸には桂民部少西之丸には上山兵庫是は備前衆なり東之丸  
には生石と申者罷居候此生石は備中石川家の士なり賀茂の城より  
聲届に日幡と申城あり上原右衛門佐被籠置候日幡の南一里程候て  
松島と云城には小早川殿御一門梨羽方被籠置候松島より東に廣瀬  
と云城あり隆景御家來桂右衛門太夫井上豊後守其外歴々の衆被籠  
置候此城は一里四方沼にて人馬の足立不申切所なり又冠山と申候  
て高松近所に小城あり是は清水長左衛門一手の士林三郎左衛門宗

重居城に候鳥越左兵衛を爲加勢被籠候又松田左衛門と申者籠候以前は備前半國を領地仕たる仁に候近年浪人仕罷居此度隆景様へ申上籠城致し候三郎左衛門世倅與三郎は清水長左衛門に付居候故高松へ籠申候又中島大炊助事中島の屋敷構には弟九右衛門を籠置自分には高松はんさうと申手先に籠り居候右之通敵地境目の城々城督に被仰付候者ども御吟味被成御人數被籠置候扱又天正十年の正月に備前境に被置せ候七箇所の城主を隆景三原へ被召寄被仰渡候は織田上總介信長中國を退治すへきとて羽柴筑前守に大兵を付て當夏は備前に至て發向の通風聞候定て浮田方案内者たるへし左ゝるに於ては各守る所の城々攻戰のちまたたるへし其内信長より計策を廻し味方に招くへし信長へ志を可通と被存候面々は可任其心候古來其例有之ならひなれば遺恨も無之候と被仰渡ければ七箇所

の城主御請に被仰下候趣誠に口惜き御誕に候左様無御心許各と被思召候者共を大事の境目の守護を被仰付候哉努々二心有之間敷候只一筋に一命を捨御用に立可申の旨申上候隆景被聞召各の志神妙の至御祝著不淺とて様々御馳走被成防戰の御談合事終り御振廻の上御脇差を各へ被遣候時各御脇差頂戴仕此度の御防戰御勝利の上重て又目出度御祝に合可申と申上る清水長左衛門各に申候は只今の御請我等に於ては難心得候其子細は羽柴筑前守發向被仕候は、人數十萬は堅く可有之候境目の小城面々の持口にて防き留始終勝利を可得とは不存候只及一戰不叶候時は城を枕にして切腹に極め候其爲に依り只今拜領させられ候御脇差を御運ひられ重て目出度御祝に逢可申とは我等は聊不存候と申て御脇差を戴き退出仕候誠に其言葉のすへ不違とて後に皆譽申候なり以上

付清水長左衛門宗治由來之事

一備中國士石川左衛門と申者沖郡を領知致し高松の城に居住仕候幕下に屬する士には長谷川清水鳥越生石林中島六人なり皆一郡或は半郡を領知候て一城を持罷居候奥郡をは須々木秋山とて兩人の者領知仕罷居候然處に石川左衛門佐實子無之に付奥郡の須々木末子筑前守と申者を申請養子に仕り高松の城を譲り其身は頓て死去致し候筑前守も不幸にして早世仕り剩へ嗣子無之に付石川の家斷絶候幕下の者共高松の城へ會合仕左衛門佐事心入を以筑前守を養子に仕候へは此好しみ有之事に候條須々木方令談合彼方差圖を一族の内申請相續させ可申と合退出仕候其時長左衛門心底に存候は由緒も無之候須々木一族を申請旗頭に可仰事心外の儀なり我等高松の城主となるべきとは存候へ共長谷川も此望有之と聞ゆれば如

何可仕哉と工夫致し候處に長谷川も清水事高松の城主を望むの由承り我等儀は座上といひ身體も宜しければ何とそ調儀を以清水を可打果と存し罷居候折節永祿八年八月朔日暮下の各高松の城へ會合仕る其時長左衛門城中にて長谷川を手打に仕り諸將に申しけるは自今以後當城の城主は我等にて候歸服の人々は人質を給はるへし若又無御領掌面々は其心に任せらるへしと申渡す各一同は歸服致し人質を出すに付宗治石川の遺跡を踏て備中半國の旗頭高松の城主となる須々木秋山兩人は宗治高松の城主と成て後恨みを含み不和になりて奥郡沖郡往來を絶す其後宗治事幕下の各を同道致し隆景様へ罷出御味方に成御奉公可仕之旨申上岡源三郎を爲質三原へ進置候事

清水宗治方へ從信長誓紙被遣事

一羽柴秀吉備前岡山著陣翌日蜂須賀彦右衛門尉黒田官兵衛兩人を宗治方へ被差越候兩使備中の宮内と申所迄罷越高松へ申入候に付長左衛門より家來兩人差出候へは信長の御誓紙并秀吉添狀相渡し信長御意の旨申渡候は清水長左衛門事は文武二道の達人の段多年被聞召及候此度備中備後兩國可宛行之間萬端筑前守申談西國の先手仕り於抽忠勤は可爲御祝著之通申渡候長左衛門信長の誓紙秀吉添狀披見仕り口上之趣承り信長公御誓紙之旨有難奉存候へとも多年毛利家に屬し當國所々の境目を預り重恩不淺然に今更逆臣の身と罷成却て主恩を忘れ信長の御味方となり西國へ御先手可仕儀屍の上の耻辱に候假令兩國拜領仕榮華にはこり候とも何の面目あつて可樂や古語にも貞女不見兩夫賢臣不仕二君と有之由承り候中々存しも不寄儀なり此段可然様にも可被仰上と返答仕兩使差返し候秀吉

返詞の趣聞届又兩人を差越口上には誠に勇士の志其理明なりと雖とも時の變化に依て大身も小身となり小身も大身と成る事古今例不少候今信長に屬せらるゝとも屍の上の耻辱とは難申僅なる一城の主として兩國の太守となられ候は武徳の顯るゝ所なりされは語に曰天の與るを不取反て其咎を受時至不行反遇其殃と云り是非御味方被申様にと被申越候宗治承り最前も申候如く輝元隆景累年の懇意申ても餘りあり一を以万を知と申せは御高察可被成先年播州上月城を攻取候刻某は小早川に屬し罷出候へは肝要の攻口に被差置候然處に浮田直家計策にて方角の土に須々木秋山と云者兩人書狀を遣し何とそ某留主をうかゝひ世伴を生取高松の城に籠候は、宗治も信長の御味方仕へし左有に於ては對兩人莫大の御恩賞を可遣の由申越候へは兩人幸と悦ひ密に家人共を高松城下へ遣し隠し

置候折節世伴才太郎後源三郎八歳の時城下の川へ遊ひに罷出候を密使共生捕奥郡へ罷歸候留守居の者案外出抜かれ不及力の通上月へ申越候某承り無本意儀に存し候處に輝元隆景被聞付本陣へ拙者を召寄其方攻口は取分肝要なる所なれども早々高松に歸り調略を以才太郎を取返し候へと被申渡候有難儀口辭し難く一族の内中島大炊助を上月に残し置其外親族一手の者共同道仕り高松に歸り幕下の侍に林三郎左衛門と申者あり是は須々木秋山の縁者にて候へは此者を以扱せ候若承引不仕候は、不便には存候へ共上月取合最中に候へは事延引不可然候間才太郎共に打果可申通申付某も無二の覺悟にて居申候處に三郎左衛門色々取扱才太郎姉を須々木嫁に可遣と堅約仕り和睦相調才太郎を取返し拙者は上月へ罷越候て輝元隆景へ様子申候へは須々木秋山兩人を誅伐被申付候儀の厚恩

明口は不

難報忘却難仕候忠功祐不能成候とも責て信長の御味方に參らぬを以志と仕候へは此旨宜被仰上被下候と申切兩使を差返し其後信長の誓紙秀吉の添狀輝元公へ隆景入御披見候事

羽柴筑前守秀吉高松城被圍之事

一同年三月廿九日秀吉八幡山を本陣として此御方境目の城々へ手遣被申付候同四月七日には鐵床山の上まふくし山へ馬を上られ朝四つ時分より八つ過迄此山に被居候て境目諸城の見合被仕極晩に被打入候備前より差寄の城にて候故宮地山を取巻同十四日未明に備前衆を以攻させられ候諸手より仕寄を付稠敷攻申に付乃美少輔十郎加番の内竹井惣左衛門と申者調儀を仕り備前衆へ致懇望各一命被助候は、城を明渡可申の通相斷候へは願ふ所に候故即分別仕候に付備前衆に城を明渡し少輔十郎を初め各罷歸り候又冠山の城は

數日堅固に相守候處に同月廿五日鐵砲の藥に火付候て不慮に焼出候白晝の事に候へは諸方より寄手見付攻込申候林三郎左衛門小身に候へは家來百五十人にて本丸に罷居門を開き突て出寄手を突散し候へ共猛勢の儀に候へは終に不相叶討死仕候家來百五十人も百三十九人は打死仕り殘る者は掛拔高松の城へ籠候其中に林與九郎鳥越五兵衛兩人は高松の城池の下と申持口に林與三郎片岡助兵衛罷居候に付是へ參り數日能く働き申候此助兵衛は長左衛門家來にて候諸所働の時首二十餘取申候覺の者にて候鳥越左兵衛松田左衛門儀は冠山にて手強く相働き討死候敵方にも手負死人數多有之此段輝元公隆景被聞召御感被遊候又高松より一里南鳴之城と申す平城あり本丸には桂民部大夫西之丸には上山兵庫助東之丸には生石と申す侍罷居候此生石は備中石川家の者に候石川亡ひ候て後隆景

様被召拘候然處に生石逆意仕り備前衆を生石丸へ引込夜中に本丸へ申候は近年隆景へ遂馳走候へ共御褒美も無之候左候處に羽柴殿御懇意不淺小市郎秀長へ御奉公申上候は、可有忠賞の由被仰下候に付彼御味方仕候此間申談候印民部大輔殿御一命無恙至岩崎送り届可申候人質等の儀御望次第に可進候城の儀早々御明渡候て最に候と申掛候民部親類桂右衛門先承り樓へ上り申候は被仰之通慥に承り届け候此中敵方へ御内通の段も淵底聞及候に付今更驚き不申候其方祐先年石川家滅亡の刻隆景へ懇望仕り奉公に罷出身に不應の知行を取今更上方へ成替候儀未練の至絶言語候中々不及返答候と申捨鐵砲を打せ候夜明候て見申候へは小市郎殿陣所一之宮より生石丸へ人數打續寄申候民部大輔内々火矢を扱置候に付三つ四つ生石丸へ打かけ候へは爰かして焼申候に付階をかけ三四人小屋の

上へあかり消申候處を民部三男孫次郎十六歳に罷成候鐵砲を以て二人小屋の上より打落し候へは消し申候事不相成候て數箇所より燒あかり惣小屋へ火移り候に付生石丸へ入はまり候敵とも崩出逃申候此時岩崎御陣よりも人數被差出候鴨之城より七八町程有之丸山御座候是へ御人數打出候を備前衆見申候て引拂退申候故民部大輔兵庫も運を開き申候民部大輔家來村上新五左衛門内藤七郎左衛門を初め十三人討死仕候元春隆景被聞召籠城に火矢嗜置候儀遠慮深き儀なりとの御意にて御褒美被遊候又翌日一之宮の本願寺より出家二人堀の向へ参り申候は是非共々々々城を被渡可然候左候はは御身命は如何様にも宜き様に可仕候と備前衆被申候使に兩人参り候との儀に候出家にて候へ共不入戲言を申候間打殺し可申とて鐵砲にて打候へは膝の上を打抜たをれ申候首を刎可申と各申候へ

共今一人の出家達て佗言中に付無別條返し申候其後は兎角の儀不申來候忍山鎌倉山の兩城へも敵取掛候由五月朔日山下より告申に付彌菴をつり昇楯をかき支度仕待居候處に山下の寺より出家一人鎌倉山半程へ上り申候は宮地山に陣取候敵今朝未明に高松へ寄申候此兩城攻申筈に候へ共旨儀替り如此に候と知せ申候又日幡之城本丸には上原右衛門佐元祐を被籠置二之丸は日幡六郎兵衛と申者罷居候處に上原逆意仕り秀吉へ佗言致し味方に成候其節六郎兵衛にも同意仕候様にと申候へ共同心不仕候に付六郎兵衛を打果し手切の印に仕り現形も此時宍戸隆景上原手前の儀無心許存せられ渡邊壹岐守と申者を日幡之城へ使に遣し口上には御自分の儀無心許存候に付以使者得御意候と被申候へは返答に如仰羽柴殿仰に任せ上方の御味方仕候若き者共御使を打留可申と申候通返詞仕候に付

壹岐守も早速罷歸候處に馬六匹乘連追掛候を能切拔無異儀罷歸候此上原は元來備後の國衆にて父をは豊將と云元就公へ御馳走仕り備後御弓矢の節は御用に立たる者にて候御家中にも親類共御座候に付旁以被掛御目元清末の御息女様を隆景様御養君に被成右衛門佐に被遣候故一廉御用に可立と被思召候處に案外未練を構へ逆意仕候御和平の後秀吉も不届者と被仰御かまひなく候故御跡より罷上り候へは播磨のかこにて僅千石の知行被遣候處に一兩年過候て死去仕候元來此日幡之城は日幡八郎左衛門と申者の居城候八郎左衛門儀御當家を背き備前へ罷り退候其跡へ上原を被遣候六郎兵衛は同名にて八郎左衛門罷居候時より二之丸に罷居候中島大炊助妹聲にて御座候に付一入此方へ忠義を奉存候就夫隆景様御意に六郎兵衛事八郎左衛門同前に逆意可仕候處に二之丸堅固に守居候儀神

妙の至御祝著に被思召候旨中島大炊へ御意候に依て六郎兵衛承り忝奉存候扱高松之城には長左衛門兄月清其子右衛門允林與三郎中島大炊助荒木一族湯淺新倉御本手より末近左衛門隆景様よりも歴歴御加勢候吉川殿よりは粟屋信濃守に數多歴々被相忝候に付御加勢の人數都て二千餘長左衛門自分の人數并一手の衆共に引合六千餘人籠り候又近郷の百姓共籠城可仕之旨申出候長左衛門承り其方など籠城の儀奇特の志にては候へ共會以不入儀なりと達て申聞せ候處に數年の御懇情難忘奉存候少し成共報謝仕度と申候て承引不仕五百人籠城仕候城中廣く御座候に付小屋をかけ兵糧を遣し置申候輝元公も高松爲後詰御出馬被遊備中猿掛へ御著陣候御先手吉川殿小早川殿は岩崎へ御陣取候猿掛岩崎の中間三里餘有之御分國中諸勢都合六萬餘岩崎のひさし山迄陣取候然は四月廿七日秀吉八幡



山より打下し高松の上龍王山に本陣をすへ高松城を二重三重に被  
取圍候高松の城は三方沼にて攻寄候儀難成候城より人數五千出向  
ひ鐵砲せり合仕り其後及防戰候寄手の討死數百人有之名城と申し  
其上堅固なる仕組に依て力攻には成る間敷と存られ水攻の工夫を  
以て五月七日にかいるか鼻と申す山へ秀吉近陣を寄られ候此城は  
廻り沼にて切所の地にては候へ共平城なるに付城の廻り三里の間  
土手を築き河水を堰留水攻に被仕候折柄霖雨にて頓て城中へ水漲  
へ難儀に及ひ候一日に兩度總陣の鐵砲を揃へ打立鯨波を作り貝を  
吹鐘をならし攻申候大雨ふり山々谷々より洪水落つとひ城中往來  
も難成候に付口かき板など取集め小船三艘拵へ候て敵陣へ夜掛の  
働さ仕候敵方には大船三艘一つにもやひ其上にせいろうを上げ晝  
夜透もなく攻寄熊手かきにて塀尖倉を引崩し候處を鍵にて突はら

明は不

りはあ  
かあり

い熊手かきを取り相働候に付敵味方共に手負死人多し秀吉の攻口  
ばんぎうと申城の手先は中島大炊助荒木一族の持口なり池の下は  
備前衆攻口に候是は林與三郎片岡助兵衛持口に候林與九郎鳥越五  
兵衛冠山より切抜一所に籠居候然は宗治存候にはかやうに城中難  
儀に及ひ候時は逆意の者出來敵を引入候ものにて候自身外廻り可  
仕候とて片山助兵衛組足輕四五人充召連毎夜夜廻り仕候處に或夜  
八幡山の麓にあかり人の形の様なるもの見え候不審に存し見候處  
に案の如く人一人遊き來て櫓の木の鼻へあかり頭に付たる帷子を  
著し脇差をさし身繕ひ仕候に付足輕に生捕召連參り候へと申付候  
足輕共參り様子を尋候へは御本陣よりの御使と申に付致同道候へ  
は宗治相對仕候處に竹の筒より御書を出し長左衛門に渡し某は宇  
多田小四郎と申者にて候と假名を名乗候其御書に永々籠城苦勞の

段は難被盡仰候上方勢強大なれば御加勢も難成被思召候此上は早く上方へ降參可仕候との御意にて候宗治御請に信長へ降參の儀不存寄處に候迎も逆意と存候心底候は、最前祐上方の味方に可參候へ乍憚無是非御意なりと書留小四郎に渡し候へは請取御本陣へ罷歸り候事

清水長左衛門宗治切腹之事

一高松城中へ彌よ堤水湛へ及難儀候様體秀吉見給ひ此御方の御陣所へ使を越し安國寺西堂を呼申され候に付急き秀吉本陣へ罷出候へは即ち御相對候て御自分を申請候も別なる事にてもなし其御方の御家は取分古き御家に候變化有之時は笑止なる事に存候何とぞ和平の儀申談度候御領國の内因作兩州は争ひの國にて候殘る八箇國の内五箇國被差上清水長左衛門に切腹被仰付候は、以來迄の儀我

不明

等請取信長へ宜く申上御無事相調可申候此段輝元元春隆景へ能々可申通被仰候に付西堂罷歸御三人へ様子申上候へ共中々御領掌不被遊候然處に天正十年六月二日の朝明智日向守光秀對信長逆意仕り京都本能寺に於て信長を奉討御嫡子□□介信忠をも二條の御所にて同日に安々と打果し候此趣を長谷川宗仁方より早飛脚を以て秀吉へ注進仕候此注進狀を三日の晝時披見し給ひ其儘押卷懷中に入られ飛脚の者早速に著仕致苦勞候湯漬を給させ候へと被仰付頓て御直に尋られ候儀有之とて御呼被成御雪隠へ被召連手打に被成夫より御近習の侍百計御供にて諸陣を御順見候て御歸被成此御方の御陣所へ御使にて又安國寺御呼候て御相對の上被仰候は彌和睦仕度存候毛利の御家も古き家にて候以前にも申候如く變化有之時は無念の儀に候手前にも此度爲何手柄も無之候に付清水長左衛門

に切腹被仰付候へは夫を一面目に仕度候御國分の事は只今迄の御領國相違有之間敷候以來迄申堅め誓約可仕候此段輝元元春隆景へ分別被仕候様に御自分達て可被申候信長も一先一兩日中に出馬候姫地迄著候へは何を申候ても不相成事に候其内急度總談候様に可被申と被仰渡候西堂急き罷歸り委細に輝元公兩川殿へ申上候處に輝元公被聞召和平の儀は左様にも可相成候清水に切腹被仰付候儀は御領國に御替候ても不被爲成候通被仰切候に付又秀吉御陣所へ参り御返答申候へは秀吉被聞召幾度も御自分異見尤に候清水に切腹被申付候へは夫を信長へ和睦の印に仕り我等も一面目有之事に候と被仰候處に蜂須賀彦右衛門生駒雅樂助西堂を勝手へ呼相對仕り内證申候は幾よりも御異見被仰上候て御和平尤に存候其子細は其許御領國の犬身衆信長よりの御誓紙頂戴候て皆領掌の御請被仕

候其證據には元春隆景御兄弟御同前の上原殿頼に此方へ一味被仕候とて其證文など見せ申候に付西堂も驚入輝元公へ申上候ても不相替御返答にて可有之候此段城中へ参り長左衛門に有の儘に可申聞と存し小船をかり急き城へ参り右の趣具さに申聞せ候へは長左衛門様子承り扱は秀吉和睦の儀被申候哉御國分の儀迄相濟候へ共我等に切腹被仰付候事不被爲成候に付被仰切候哉御家の御安危も此時に相極り候箇様の時節抛一命後代に名を残し候祐武士たる者の願ふ所の幸に候御家に被替候ても拙者を被差捨間敷との御議定の段忤家の面目不過之候片時も命を延候儀にあらず候早々秀吉へ可被仰出候委細は秀吉へ捧書翰可申定と申候て西堂を返し末近左衛門其外頭分の者共呼集め右の通申聞せ明四日晝時切腹すへしと申聞せければ各一同に御自分御一人御切腹可被成との儀御尤にて

以候へ共各儀切腹不仕吉田新庄三原罷歸り何の面目御座候て傍輩衆に相對可申哉物頭として籠城仕候者は、つれも切腹可仕と申候へは宗治聞て毛利家安危此時に候へは重ねて御用に御立あるへし此度は我等一人にて相濟事なり乍去御檢使にて候へは末近左衛門大夫殿は同道可仕と申候刻舍兄月清我等も切腹可仕候此時切腹不仕候へは如此の難を遁れ可申ため出家仕候に極り候我等は世上にかゝつらひ候事いやに存し出家仕候長左衛門より兄に生れ此度の死をのかるへき道なしと申せば各聞て仰尤に候へ共御切腹あるへき道理なし長左衛門殿後世を御とむらひ候祐出家の役にて候へて異見仕候へ共承引不仕申切候其後秀吉御本陣へ申出候書札に曰謹而奉述愚意

當地永々御在陣諸卒勞力乍恐奉察候然者當地極運之儀近奉覺

候清水兄弟末近左衛門大夫此等三人者代衆命可致切腹之條被垂御憐憫籠城之輩被施於寛仁之君德悉於御助者忝可奉存候依回章明四日之日中可及切腹候然者小船一艘并美酒佳肴聊預恩賜候者且忘籠城之辛苦且可散老兵之疲勞候恐々謹言

天正十年

六月三日

清水長左衛門尉宗治判

蜂須賀彦右衛門尉殿

杉原七郎左衛門尉殿

兩人返狀

御狀之趣筑前守へ令相達候之處各三人代衆命籠城之諸人可有御助之結構一入被相感候則可應御意之旨候然者小船一艘酒肴十荷并上林極上三袋令進入候明日檢使出候様にと御使者被申候得共

意存候被仰越候外縦雖爲長男連枝切腹有之間敷旨被申候恐惶謹言

六月三日

蜂須賀彦右衛門尉

杉原七郎左衛門尉

清水長左衛門殿

兩人實名有之不寫

回鯉

秀吉公御家譜には切腹の人数に難波傳兵衛書加有之候へ共御當家古老の舊記不見候に付不書記之候なり

付白井與三左衛門事

一宗治家老白井與三左衛門と申者忠信之勇士にて御座候に付大手の矢倉を預け置候處に去る四月廿七日の戦に股を打せ候へ共剛強の者にて候故其身堅固に罷居候六月三日の晩本丸へ使を出し直に申

上度子細あり御出被成被下候様にと申に付宗治頓て参りければ與三左衛門大に悦び御切腹明日に相極り候と承り候定て秀吉より檢使参るへし檢使の前にて堅固に可有御切腹と存候某試みに切腹仕候いかにも安きものにて候とて腹巻を除て御覽候へと申せは宗治是を見て扱々殘多き事なり其方常々忠心他に勝れ候に付妻子の行衛を可頼置と思ひけるに案外我等に先立けるかと云ければ乍恐御介錯をど望み候に付即ち首を打て本丸へ歸り候事

付宗治最期之事

一宗治事城中萬事の仕置注文に記し妻子の向後懇に申置爲暇乞一獻をはしめそれくゝに盃取かはし嫡子源三郎は人質として三原に居候に付末期の歌三首を殘し置盛人の後此歌の心をさとり忠節を勵すへしと書置候其歌は

一曰

恩を知り慈悲正直にねかひなく辛勞氣つくし天にまかせよ

二曰

朝おきや上意算用武具普請人をつかひて事をつゝしめ

三曰

談合や公事と書狀と威儀法度酒と女に心亂すな

六月三日

清水長左衛門尉在判

源三郎殿

參

右之通數々の申置など相調小童に髻をぬかせ居候處へ幕下衆並に吉田新庄三原よりの加勢衆爲暇乞參り此體を見て時節不相應の男ふりの御作りなされやうやと申せは宗治打笑ひ我等首は信長の目

見すへし其儘にて髻を置からは籠城一端の心遣ひに忘却したりと見る人に訪らるへきもいかゝなれば男をつくり候と挨拶なり各申は以前にも申候様に此度御一同に切腹仕りいつく迄も御同道仕度候無別條各罷歸候は、世上の嘲り眼前なりといへは宗治聞て尤至極なる被仰様にて候へ共一騎當千の時節なれば各は御在所へ御歸候て後々の御用に立たまへ此度當城に於ては秀吉へ申出たる者共はかりにて相濟しとて其段申留候扱天正十年六月四日己の刻長左衛門衣裳を改め小船に乗り蛙か鼻と云所迄船を漕出す西は味方の大將輝元公吉川元春小早川隆景御陣なり東は敵の大將羽柴筑前守秀吉の御陣なり兩陣の間に舟を留め候時秀吉よりの檢使堀尾茂助小舟に乗來て宗治に相對し秀吉申候は此間申談候首尾無相違是迄御出殊勝の至に候永々籠城御苦辛令推察候との儀なり左ありて後

茂助方よりとて美酒佳肴差出しければ宗治甚悦ひ筑前殿へ御禮の儀茂助殿頼存候宜被仰可被下候とて末期の盃を順し宗治誓願寺の曲舞をうたひ出せは舍兄月清末近左衛門太夫小者の七郎次郎同音に謠納め次第々々に切腹仕る介錯は幸市之丞と申長左衛門家來なり此時宗治行年四十六歳なり辭世の歌に曰

浮世をは今こそわたれ武士の名を高松の苔に残して

宗治其外切腹仕候へは市之丞いつれも介錯仕り頸桶に首を納假名を申て茂助に渡之死骸を取歸り能納て後市之允も殉死仕候此市之允は數度鍵を仕り宗治家中にも名を得たる者よと月清小姓一人名姓知不殉死仕たると記し候舊記有之如件

付輝公元秀吉御和平之事

一清水長左衛門切腹の様體見聞仕候者下々に至る迄古今無雙の義士

なりとて敵味方共に褒美仕候右之趣西堂御本陣へ罷出申上候輝元公元春隆景御一所にて被聞召長左衛門事案外なる儀共不及是非無類の忠義なり不便に被思召候との御意にていつれも被遊御落涙御惜み被成候儀不大形候雖然如此成行候ては不被及御力御和談の儀急度可被遊と御談合にて秀吉御本陣へ西堂罷出雙方御誓紙の上相濟申候御國分の儀は因幡美作は争ひの國にて候故不及御沙汰伯州は南條事公儀御味方に罷成候間やはせ川を限り備中は清水切腹候上は河邊川を境にして可有御上表候殘て安藝備後周防長門石見出雲隱岐備中半國伯耆半國引合一箇國以上八箇國可爲御領知候相定候秀吉御判形御筆本は西堂見申候所にて御血判させられ候

付信長御切腹爲御知從秀吉御使者事

一高松籠城の人数雜兵に至る迄下城仕候へは秀吉城を請取せ杉原七

郎左衛門を被籠置候其後諸將を集め秀吉談合に我等事急き當地を引拂ひ令上洛明智を可打果候諸陣に煙を立在陣の體を見せ可引取候哉亦輝元へ使者を遣し信長御切腹の儀真直に申達し其上可引退候哉各いかに被存候哉と被仰候蜂須賀彦右衛門承り如右御和談相濟御誓紙の上出拔候様に御退陣は如何可有御座候哉中國衆は律義に御座候へは誓紙の違變御座有間敷候と申候へは此儀秀吉氣に合候て其方申候様一段可然候即彦右衛門に参り候て輝元兩川へ口上可申達と被仰候に付彦右衛門供の士十六人すはたにて召連此御方御陣所へ参り趣申入候へは先元春隆景御出合被成候に付秀吉の御口上申上候其口上に去る二日惟任日向守依逆意信長父子於京都生害被仕候就夫我等事急度令上洛遂義戰主君の敵を可打果覺悟に候此間申談候誓紙の趣無御相違に於ては可爲本望候若又御違變有之

御心底候は、御返答次第可得其意候との儀に候兩川殿被聞召輝元へ申聞せ其上御返詞可申と被仰右の様子輝元公へ被仰上候へは御一門御家老中被召出御談合候各存寄被申上候處に隆景被仰上候は近年秀吉弓矢の取やうとくと見申候に智謀ありて勇將たり大志あり以來は天下の仕置も秀吉たるへし信長父子の討死は秀吉の幸不過之此時誓約を違變するならば秀吉遺恨骨髓に徹すへし左ある時は向後當家の滅亡疑ひなし今彌よ和睦を厚くして信長の死去を弔ふに於ては秀吉太慶爰に有へしと被仰上候へは輝元公尤と御同意にて御返詞には今月二日惟任逆意に付信長御父子御死去の儀貴殿御惆情察存候急度爲可被遂義戰御上洛の由被仰越候御尤に存候此間申談候誓約と申し殊に被及義戰候へは少も疎意不存候御用に御座候は、人數いか程なり共加勢可仕と被仰彦右衛門被差返候内藤



越前守を御悔の御使者に秀吉御陣所へ被遣候處に秀吉大悦にて早速對面し相當の御返詞にて御加勢の儀被仰越忝存候乍去人數は入不申候間鐵砲五百挺弓百張旗三十本御加勢頼存候通被仰越前守を被差返候同月六日には高松を出馬にて同八日姫地に著城し給ふなり此御方にも岩崎御陣を猿掛へ御打入被遊候處に其道にて信長切腹の到來御座候此御注進仕候者は原平内と申て雲州浪人にて御座候久敷相原盛重に罷居其後上方へ參り明智日向守家中に罷居候此飛脚も六月二日に足仕候へ共順風惡敷候てみかけへ上り申候間陸を參り候に付延引仕たる由に候事如件

清水長左衛門嫡子源三郎事

一宗治妻子は備中河邊迄退申候家來の侍共も大形手負戰死仕候に付漸く百騎計供仕候源三郎儀も隆景様より御暇被下候に付河邊へ參

り候て一所に罷居候先當分の御心附として百人扶持三原より被下候其後猿掛へ被召出候て輝元公被遊御對面長左衛門遂忠死候段無比類被思召候とて御懇意の御意にて御感狀被下其上名物の御腰物御脇差被作拜領領知居城の儀隆景を以頓て可被仰出の旨御意被成難有仕合にて罷歸候右御感狀に曰

今度羽柴筑前守押下備中高松城取詰候處に父長左衛門以無二之覺悟雖數日相抱候不叶令自害城中之者助置候事都鄙之名譽敵味方共に以驚耳目候古今之武勇當家之面目忠功無比類之段連々以不可有忘却候仍太刀刀令進候委細者隆景可被申候恐々謹言

天正十年

六月二十六日

輝元公御判

清水源三郎殿

左候て宗治一手の者共いつれも次第を以被召出籠城中苦勞仕候段  
 神妙に被思召候知行方の儀追付隆景を以可被仰出旨被仰渡夫々に  
 應し御褒美の品々被作拜領候なり一とせ隆景様元長様大坂御上り  
 候て御下向の時黒田官兵衛御附被成陸地御下り被成候節備中河邊  
 にて源三郎宿所へ御立寄被成候官兵衛源三郎を呼出し秀吉の御意  
 として被申渡候は清水事は無雙の士なり實子有之通被聞召候急度  
 差上せ可申候知行可被遣旨被申渡候源三郎御請に難有御意にて御  
 座候へ共父事一命を毛利家の用に立候間私も輝元に奉公申度の由  
 申候へは隆景元長官兵衛殿尤の申様に候とて御感被成候官兵衛殿  
 歸り被申候て秀吉公へ具に被申上候由候隆景様豫州御拜領候に付  
 源三郎事被召連喜田郡の内三百貫被遣候頓て又筑前御拜領にて隆  
 景様御國替の時御供被仰付知行御加増拜領仕り金吾殿御代にも御

奉公申上居候處に山口立蕃秀秋へ申上候は清水事は度々秀吉公御  
 意の次第も御座候間御加増被遣可然と申上候へは二千石御加増拜  
 領させられ候其後金吾殿御小身に御成候て越前へ御國替の時御暇  
 申上浪人にて居申候刻安國寺を使に仕り石田治部少申越候は佐保  
 山へ参り候は、七千石に三百人扶持出し可申の由申候へ共重疊申  
 斷り参り不申候又隆景様高麗御渡海の御供致し都合戦の時井上五  
 郎兵衛手に附罷居遂忠戦候に付四郎兵衛五郎兵衛同前に隆景様御  
 感狀被下候都合戦の次第奥に書記し申候に付不具候又大津城攻の  
 時井上五郎兵衛申談一番乗仕候其節立花左近殿大津の城攻手にて  
 御座候に付御覽候て宗瑞様へ御取成被申上候木津御下屋敷へ御下  
 城候て御座被成候刻五郎左衛門被召出此度所々にて忠節申上候間  
 御感狀追て可被下候先罷下り妻子の作廻仕候様にと被成御意御暇

被下罷下り候處に備中水嶋にて飛脚船の者申候は毛利殿御身體悉敷ならせられ候由風聞承り候と申候に付無心元存し五郎左衛門事水嶋より引返し又大阪へ上り右の段申上候へは福原越後守殿堅田大和守殿御廣間被罷出候刻御前被召出父長左衛門以來忠心の至神妙に被思召候今度の志抽衆候と御意にて御手つから兼光の御腰物被作拜領候其後井伊兵部殿へ初て輝元公御出被遊候刻も御人差にて御供被仰付頓て御暇被下罷下り候源三郎儀五郎左衛門に名を改め候後には美作守と申候事如件

久留嶋心替之事

一天正十年夏高松御陣の半來嶋事從信長公の計策に付逆意仕り中嶋の大崎と申浦へ爲手切焼働仕候備中御在陣に付御國分の諸士不殘御供致し候に依て藝州御留守も皆騒々申候此段被聞召頓て北前衆

阿武船  
は安宅  
しあふ  
乎あぼし

被差向候あたけ船御かこわせ候て船頭には白井縫殿助御目附は南四郎兵衛總都合の大將には浦兵部少被仰付候數十艘の軍船を押立各久留島へ攻寄廻りの高山に陣取候海上に有之城にて候故阿武船に大筒を仕掛城際へ押詰三日晝夜共に稠敷攻候へは籠城難相叶小船に乗り夜中欠落仕り播州あふしと申浦へ退申候城邊の鹽相乗前不案内に付追掛打取候事も不相成無異儀退去仕候即彼城には御番衆被置候に付各歸陣仕候隆景様兼て阿武船被仰付置せられ此度御用に立られ候宗勝方より阿武船にて得勝利候通申上候へは御自慢にて御機嫌能候事

依信長切腹南條兄弟城明退事

一南條伯耆守元續事信長父子御切腹の告を聞て俄に妻子を召連羽衣石の城を欠落仕候高野山の附城に居申候山田出雲守松か崎の城に

居候小森和泉守程近く候に付聞付城兵悉く羽衣石へ押かけ候へ共  
遅く御座候て荷物など持申候足輕數十人打取候岩倉に居申候元續  
弟小賀茂元清も同時に罷退候を付城に居候正壽院利安尾賀茂四郎  
聞付押掛城を乗取候然は信長より元續に遣られ候天下一月毛と申  
馬丈九寸五分有之を捨置候に付此御方へ取候て山田出雲守より元  
春様へ進上申候又元清に遣られ候口切栗毛丈七寸五分是を以正壽  
院利安取候て元春様へ献上申候正壽院栗毛と申候なり如件

秀吉山崎合戦勝利之後爲御使者安國寺被差上候事

一秀吉山崎合戦被得勝利明智光秀を被討取候通被聞召輝元公より爲  
御使安國寺被差上候て蜂須賀彦右衛門方迄御書被遣御祝詞被仰候  
其御書に曰

今度和睦之儀秀吉申談本望候殊天下事被屬御勝利之段尤珍重候

彼是以都鄙之太慶此節候彌長久可申承候仍太刀一腰銀子百枚進  
之儀誠表御祝儀計候猶任安國寺西堂口上候恐々謹言

七月十八日

輝元公御判

蜂須賀彦右衛門殿

御宿所

今度和睦之儀以御馳走秀吉申談本望候殊天下被屬御勝利段尤珍  
重候彼是以都鄙之太慶此節候仍太刀一腰銀子拾枚令進之候寔補  
御祝儀計候彌長久可申承候猶任安國寺西堂口上候恐々謹言

七月十八日

輝元公御判

蜂須賀小六殿

御宿所

今度御和睦之儀相調尤珍重候殊天下被屬御大利候誠以目出度存

候彌長久可申承候仍御太刀一腰馬一匹令進之候聊補御祝儀計候  
猶任安國寺口上候恐々謹言

七月十八日

吉川駿河守元春御判

蜂須賀小六殿

御宿所

先度者和睦之儀以御馳走相調珍重候其後頓而可申入之處安國寺  
儀被罷上候條打過候然者自輝元爲御祝儀重而西堂被差上候間御  
親父被仰談可然之様御入魂肝要候隨而國切等之事被任天下御存  
分之上者近年申付候傍口被加御分別候者一入之儀申談長久可得  
御意候西國靜謐之儀併秀吉御安中在之事候仍而御太刀一腰馬一  
匹進之候表御祝儀計候猶任口上候恐々謹言

七月十八日

小早川

隆景御判

明口は不

蜂須賀小六殿

御宿所

羽柴秀吉公へ證人被差出事

一天正十一年秀吉公へ爲御證人吉川殿よりは宮庄民部少經言小早川  
殿よりは毛利四郎元綱御上洛候元綱は御歳十七歳經言は二十三歳  
の御時なり桂源右衛門事元清様へ御附置被成候を此度御雇ひ候て  
四郎殿へ御附被成御上せ候於上方秀吉御目見被遊御懇意の御取持  
候經言の御事は藏人に名替被仰付候元綱をは藤四郎に被仰付候て  
秀の御字被下被改秀包候左候て上方御逗留候處に翌天正十二年織  
田信雄と秀吉公御半悪く成御取合候家康公を信雄御頼被成候に付  
御領掌被遊尾州へ御出張候て小牧山に御在陣候此御陣の時御人數  
揃へらるへきたため江州坂本に秀吉公御逗留候刻爲御暇乞藤四郎殿

御出仕候處に桂源右衛門を秀吉公被召出藤四郎事俄の儀にて可爲迷惑候へ共此度の御陣へ可被召連候萬事不如意に無之様に可被仰付候間左様相心得候へと御意被成御出馬の刻御旗本に被召置泊りにては下々の賄ひ迄被入御念被仰付候に付御不如意の事も無御座候其後秀吉公坂本迄御歸陣被成秀包被召出御暇被下御先へ御上京候刻源右衛門被召出秀包事若く候へは京にて用事多く可有之候此金子を以相調可申候此度は俄に召連候處に無別意御供御祝著被成候と御意にて甲州の碁石金三百兩御手つから御渡被下候一兩宛丸く吹たる金子なり左候て秀包は御先へ御上洛候此時藏人殿も御出可被成儀候舊記に無御座候定て吉川小早川兩家よりの人質には不及候間輝元人質として藤四郎一人罷居候へは相濟候通被仰出藏人殿は御歸國候哉と存候事

從輝元公秀吉公へ御使札之事

一天正十一年の春江州柳瀬に於て秀吉公柴田修理亮對陣の様子被聞召秀吉公御陣所へ御使者被進候に付秀吉公御返書に曰

去朔日之御札於江州柳瀬今月十二日致拜見候隨而瀧川左近柴田修理令一味對信雄企謀叛候因茲瀧川爲御成敗北伊勢表罷立城廻悉令放火瀧川息八郎居城之峯並龜山兩城取卷龜山手堅攻詰付致落城候峯城彌不遁散様信雄取卷候處に柴田江州北郡越州到境目出張候曲者と存即時秀吉懸付可刎首と存候得は筑前守鍵先を存付山奥へ駈入候押詰可攻殺相究候處に高山取上城を拵及難儀雖居申候山中爲切所之間可攻上様無之付而付城四五箇所申付秀吉は隙明長濱城于今有之事に候二三日中可令上洛候條於時者可御安心候前々せかれ之時さへ信長於家中は秀吉まねを可仕者無之

明□は不

候つる唯今之儀は中々於坂東目筑前守少茂可立合者無之に付人數之儀は八幡大口我等恣に御座候間可御心安候先度預御札候之處に事繁候而御返事不申入候乍去我等人數城攻野合可致合戦をも見せ候は、輝元へ掛御目候と存にと抑留候右如申候近日可罷上候條於京都御返事可申入候猶以播州より西之事は不存於東は津輕今浦外濱迄我等鎧先可相堪候様依無之悉羽柴應鞭先隙明候間可御心安候猶追々可得貴意候恐惶謹言

卯月十二日

筑前守秀吉御判

毛利右馬頭殿

御返報

從秀吉公隆景様へ御返札に曰

去五日之御狀於江州坂本令拜見候事

一去月廿一日柴田修理亮四箇國之人數有之儘召具し三七殿引入令一味武篇仕掛候事

一各合戦を掛候を筑前守面白存先手備二萬計濃州岐阜へ差向瀧川をも二萬計に而取卷せ候事

一柴田修理亮取出候所へは秀吉馬廻計に而三萬有之處へ三千之分漸掛候柴田儀於當方せかれ之時分より及度々武篇仕たる者候故三度迄企鎧戰之體驚目候卯ノ刻より未ノ刻迄切合有之互に櫻を折敷休息候而勝負不相見候事

一秀吉見合候而小姓共計に而柴田旗本へ切掛即時崩五千餘討捕之處總人數木之目之弓手へ悉逃入候事

一廿二日越州府中へ取掛候諸城雖相抱候乘崩刎首候得は相殘處令退散候事

一越州北庄柴田居城之儀數年相誘三千計留主之者置候處に修理亮馬百騎計に而逃入候事

一廿三日息をも不繼取掛相圍み乘破即城中之廻十廻十五廻陣取せ候事

一柴田に息をつかせ候ては手間も可入かと存日本之治此時に候條兵をも討死させ候ても筑前守不覺にては有間敷と存與風思切廿四日寅ノ刻本城へ取掛午ノ刻に乗入悉刎首候事

一城中石藏高築天守九重に上候處に柴田二百計に而相殘候つ城中せはく候之故入込候て互之友道具に而手負死人依有之總人數之中に而兵共を撰ひ出天守之中へ打物計にて切入せ候へは修理亮も年來武篇仕付候武士に而候故七度迄雖切出相戰候事は依不叶天守九重目之上に取上り欄干に腰をかけ修理亮腹之

三百十五

切様を見置候て後覺にせよと申に付心有士は泪を流鎧之袖を浸候仍之東西むつそと靜々候へは修理亮妻子等を刺殺其外一類身に不替者八十餘腹を切廿四日申ノ刻相果候事

一廿四日加州へ令出馬候處に諸城雖相抱候筑前守太刀風に驚草木も靡隨ひ體に付加州能登越中迄平均に相果候依之越中之境目金澤と申城に馬を立置目申付候内越後之長尾人質筑前守次第に令覺悟之由候條令赦免去七月安土へ打入候事

一三七殿之儀信雄被出御馬是又岐阜之城攻崩三七殿儀は不及申悉刎首候事

一瀧川事勢州長嶋と申所に數年有之に付足輕共に取卷せ候條是又可刎首事日數不可有幾程候事

一隙明候條筑前守は江州坂本に有之此中忠節仕候者には國郡を



も念をやり申付候事

一日來どうだまり不情之者をは成敗可仕候へ共秀吉人を拔候事  
嫌に付助命先々之國にて替地を遣何之國郡をも念をやり申付  
候事

一來月中旬國分知行割をも相濟可申候間日來骨を折候諸士七月  
三十日は相休可申候事

一總人數をも徒に可置儀も不入事に候條其御國端へも罷出境目  
の儀をも相定連々無等閑胸をも相見せ可申候間有御分別秀吉  
腹を不立候様に御覺悟尤に候事

一東國は氏政北國は景勝筑前守任覺悟體に候毛利右馬頭殿秀吉  
存分次第被成御覺悟候へは日本治頼朝以來爭可有勝候哉能々  
御異見専用に候御存分於有之は不被御心置七月以前可仰蒙候

八幡大菩薩秀吉如存分候は、彌互に可申承候事右之趣一々輝  
元へ可被相達候事肝要に候猶御兩使口上申渡候恐々謹言

五月十五日

秀吉御判

小早川左衛門佐殿

御返報

吉田物語附尾中卷終

吉田物語附尾下卷

豫州金子城被責崩之事

一豫州河野通直の幕下金子と申侍通直を背き土佐の長曾我部に屬し候其節長曾我部は阿波讃岐を切隨へ三箇國の領主なるに依て通直一分として退治不相成御當家へ御加勢の儀頼み被申に付御領掌なされ秀吉公へ被仰伺候へは四國御退治可被成と被思召候折柄に候上方よりは大和大納言秀長に羽柴秀次被相添被差向候間早々御渡海可被成旨被仰出に付天正十三年六月輝元公は備後の三原迄御出張遊され候豫州へは小早川隆景吉川元長二萬餘の御人數にて御渡海候秀吉公より爲御檢使黒田官兵衛被差越候同年七月二日黒川太郎居城へ押寄せ被取圍候處に金子より騎馬三十騎計にて物見を懸此方御陣所近く働き申に付隆景御家來衆百計出向ひ候へは物見の

者共早速引退候其後總勢城を取巻仕寄を付責申候へは黒川不相叶降參の御詫言申上御分別の上城を明渡し土佐へ罷歸り候に付請取吉川殿より香川左衛門尉を被籠置候同七月十三日金子の城へ取懸候刻吉川殿衆城の尾頭へ責上り候處に城より三百人計突て出る今田中務松岡安左衛門香川兵部眞先に進み切て懸り敵を悉く城中へ追入候同十四日盆田越中守熊谷豊前守を先として各仕寄を付十五日には總勢の城責と相究候處に十四日の夜中城兵突て出る盆田熊谷請留仕拂候に付敵共山を傳ひ三百計土佐の方へ欠落仕候此時盆田熊谷城へ乗込候へは總勢も續て乗込候小早川殿衆には眞田孫兵衛裳懸彌左衛門吉川殿衆には松岡安左衛門井下左馬允朝枝信濃守桂五郎兵衛山縣源右衛門綿貫權内江田新左衛門井上又左衛門三吉九郎兵衛野上右衛門允市川五郎右衛門いづれも分捕仕候城主金子

をば三村紀伊守家來討取候諸手へ打取首數都て三百餘級也同十六日には新井の柴尾へ兩川殿御陣を替らるゝ處に石川帆柱兩城共に明退候に付此所に御滞留候て上方衆を御待被成候羽柴秀長羽柴秀次に其勢六萬にて阿波國に赴き長曾我部新右衛門居城和氣の城を責らるゝ處に新右衛門不相叶降參仕る夫より秀長兵を進めて長曾我部元親弟親安居城一の宮の城を責らるゝ親安も降參の詫言申すに付赦免し給ひ桑名左衛門籠居候木津の城へ寄らるゝ刻一夕風雨烈しき事あり其紛れに左衛門城を去て土佐へ逃退候又仙石權兵衛に人數を付讚岐へ向られ候處に權兵衛八島の城へ押寄せ即時乗取候に付秀長秀次兩將共に佛殿と申所へ御陣替仕候兩川殿も同所へ御陣替候て秀長に御相對被成候へは豫州表御退治の由御軍忠不淺の段御感悅被成候其後土佐へ御打入候て御退治可被成と御談合相

極り既に御人數を向られ候處に長曾我部頼りに降參の御詫言申すに付御無事相調ひ秀長秀次大坂へ御歸陣候によつて隆景元長も御歸帆被遊候事

小早川隆景吉川元長大坂御參勤之事

一天正十三年十月秀吉公へ御禮爲可被仰上隆景元長御同道にて大坂御上り被成候十月中旬に堺の浦へ御著船被成候へは此段秀吉被聞召蜂須賀彦右衛門黒田官兵衛爲御使被差越相當の御意御座候て來る十九日可有御登城の旨被仰出候に付十八日には兩川殿御同道にて大坂へ御出被成候住吉天王寺へ段々に御使被差出候翌十九日に御登城候へは則御對顔有之様々の御馳走御饗應誠に善盡し美盡しとは箇様の儀にて可有御座と各申候御饗應の上にて秀吉公仰に先年於備中高松令和睦開陣候處に信長の御事其方へも告來るといへ

共誓約の旨と不被違候に付秀吉所存の儘に惟任を討果し如此天下を治め候此段少も無忘却候と被仰御茶過て天守を見物させ申すへしと被成御意御同道にて御上り被遊候御兩家御供の衆迄被召連見物被仰付卷物其外品々被爲成拜領候同二十日に爲御禮御登城候處に御能被仰付終日御亂酒にて種々御馳走御座候言語を絶たる儀共に候隆景御家來井上又右衛門元長御家來今田中務へも秀吉公秀次より御馬拜領被仰付候其後御意被成候は來年は九州御退治可被成と被思召立候御先手は毛利家御頼可被成候元春事隱居候へ共弓矢巧者に候間出陣可爲御祝著の旨御詫被成候左候て御歸國の御暇出候時冬海にて海上は無御心許候間陸地を下り被申候様にと被仰黒田官兵衛蜂須賀彦右衛門御付被成泊りとまりにて下々の賄ひ迄被仰付候備中河邊よりは御領分に付兩人衆も被罷登候此時小早川殿

へ伊豫一國五十萬石拜領被仰付の旨被仰渡候秀包へは豫州宇和郡  
拜領被仰付候間同國大津の城に可有御居城の通被仰渡御兩所御仕  
合能御下國候て早速吉田へ御出仕被成趣委細に被仰上候其刻輝元  
公へ隆景被仰候は來年は關白殿九州爲御退治必御出馬にて可有御  
座候此方領國御通に候成程當家の儀無御心許可有思召候間お南様  
清光院殿御參宮の御願被仰上候は、關白殿も安堵可被成候左候時  
は御當家の往々迄宜しく可有御座と存候如何被思召候哉と被仰上  
候へは輝元公被聞召一段可然可有之候隆景彌宜様に御計ひ候へと  
御意被成候隆景被聞召お南様へ此段申上御内意承度候無別條御分  
別にて候は、隆家元續へも被仰達可然存候と被仰候て則お南様へ  
被仰上候へは此頃は都鄙兵亂の砌御上洛の儀如何敷被思召候乍去  
御家の御爲宍戸家の爲に成申事に候は、いか様になりとも隆景御

計ひに御任せ可被成と被仰候に付頓て隆家へ隆景御相對候て右の  
段御物語被成候へは隆家御返答に先年我等娘を豫州へ被遣候時手  
前存所は申候貴所御存の通に候元源以來御弓矢の御手子仕隨分致  
忠節御手廣く成候是又御存の前に候女子迄も御弓矢の役に立申事  
於手前も奇特成儀と存し候宜様に被成可然存候と被仰に付早速五  
龍より御歸候て輝元公へ様子被仰上お南様御參宮の御願被仰上候  
へは關白殿御機嫌にて九國御退治の儀彌被思召立候尤從輝元公御  
人質には右京大夫殿翌年御上京の筈に候此とき右京大夫殿御年九  
歳なり

九州御退治之事并小倉合戦之事

付輝元公豊前御渡海之事

一天正十四年秀吉公九州御退治の儀被思召立御先手に御當家御頼み

被成候て御領國の諸勢可有渡海の旨被仰出候に付輝元公より松山源次兵衛を大將に被仰付桂兵部大輔三刀屋彈正左衛門福間彦右衛門其外歴々被指添人數三千餘下關渡海被仰付門司の城番に被籠置候然る處に高橋方の端城小倉より足輕を出し鐵炮せり合仕候に付先小倉の城を責取可申と源次兵衛存候折節稻津見羽右衛門と申候者人數五百計にて門司の近所へ働き候源次兵衛此様子を見て定て小倉の城兵半分は出へし爰にて此勢を討留候に於ては籠城は成間敷候われ打取れと下知して三千餘の城兵悉く引卒し突て懸る刻又小倉より二千計人數出て羽右衛門と一所に成て相戦即時小倉勢を突立迫崩す處に秋月一千餘の人數にて加勢し此方の人數の右の方より横を打に付門司かた忽ち突立られ既に危く見え候に付福間彦右衛門十文字の鎧を以敵數多かけ倒し其身も其場にて討死する桂

兵部少三刀屋彈正此様體を見て爰を退ては武士たる者の恥辱なり一足も退間敷と申合居敷てひかへ候小倉勢は勝に乗て切て懸る桂兵部少備にて請留追つ返しつ相戦ふといへとも敵多勢なれ終に兵部少討死する三刀屋家來是を見て桂殿はやうたれ給ひて候早速御懸りわれと諫めければ彈正聞て懸るも引も時の見合なり勝に乗競ひ來る敵にかゝるといふ法はなし我等家中の者共は一人も懸るへからず皆居敷て其場を不去打死すへしと下知して待處に案のこどく敵兵競來て突てかゝる三刀屋家人十七人同し枕に討死する彈正少しも騒かす鎧先を揃へ待かけければ小倉勢不得掛して次第々々に引退くてゝに依て三刀屋十死を免て門司へ歸城仕るなり松山源次兵衛は高橋に討負無是非存候處に備中より三村紀伊守罷下に付三刀屋三村に談合仕其後七曲と云所に伏兵を置いて源次兵衛城兵

二千餘人引卒し小倉の城へ押寄る高橋秋月是を見て今日は一人も残すまじ可討取とて勇み進て打てかゝる源次兵衛少々矢軍など仕り引退く敵兵彌競ひ追かゝる處を思ふ圖に引請源次兵衛取て返す三刀屋三村兩將の伏兵七百餘一時に起て切て懸る小倉勢前後の敵を防ぎ兼て足々に成て引退く松山勢追懸數十人打取得勝利候也其後吉川元春小早川隆景吉川元長同藏人御分國總人數三萬餘人一同に小倉へ御渡海候秀吉公より御檢使は黒田官兵衛殿なり輝元公も長府迄御出張被遊候然處に小倉の城兵兩川殿御渡海を聞て城を明香春の嶽へつはみ候に付黒田官兵衛小倉の城へ入替り被申候吉川殿小早川殿は牛房原に御陣を居たまふ又小倉の近邊大野と申在所に宮山と云城あり一揆共籠り居候に付吉川殿衆押よせ山下の民屋放火仕候刻城より打て出防戰仕る境外記山縣木工助家人安田神助

三百二十二

廣岡源兵衛高名仕候山縣木工助綿貫權内千代延與助手負候に付味方の旗色悪敷なり既に敗軍すへき様に見え候處に佐伯兵右衛門鐵砲にて敵の足輕大將と見え候者を馬上より打落しければ敵兵騒々立に付味方は是に力を得て旗色なをり候かゝる處に敵二百計の別手來て先を遮さるといへ共境外記松岡安右衛門射拂く引退に付總勢も能凌き罷退候敵も夫よりは不付送城中へ引入候其後隆景元長經言同國神田松山へ御陣を替られ候へは輝元公小倉へ御渡海被遊候元春御事は腫物御煩ひ候て小倉に御在宿被成候左候處に秀吉公より寒氣の時分御軍勞爲御尋森勘八森兵橋爲上使御差下被成彌九州御退治の儀御頼み被遊の旨御意にて輝元公吉川殿小早川殿へ御朱印被成下候事

宇留津城被責崩之事

一豊前宇留津城に賀來與次郎と申者籠居候先此城を御責崩可被成に  
黒田殿隆景元長御談合相極り候黒田殿へは穴戸備前守元續に人數  
一萬御付被成被相添其外には宗像長野を御付被成候いづれも御一  
同に松山を御出馬に宇留津へ被寄懸候城の南は黒田殿北は小早川  
殿西は吉川殿御請取にて三方より仕寄を付責らるゝ然處に黒田殿  
手より指物を抜て城中へ投入候を敵是を取て走り廻り候を諸手の  
者共見付黒田殿手よりはや乗たるはと云もはてす我先にと責寄す  
る城よりも弓鐵砲透間なく射出すに付眞先に進み候牛尾大藏左衛  
門鐵砲に中り打死する是をも不省總手より乗込城中に火を放つ賀  
來與次郎叔父に賀來源助とて大剛強の者あり名乗懸切て出る吉川  
殿家中境與二郎渡し合相戦ふ處に與次郎手を負不叶して引退く香  
川兵部續て渡合切結ふ香川打付候太刀を源助受はつし手負てひる

ひ處を香川押へて首を取釜田越中守は敵城中より可出處を見はか  
らひ待居候處に如案敵切て出候に付自身敵を討取る其外柳澤新右  
衛門栗屋次郎右衛門福間市佑渡邊壹岐守兒玉筑後守兒玉小二郎山  
田吉兵衛村上又右衛門松山源次兵衛波多野源兵衛各首を取り手柄  
仕候吉川殿衆には今田中務栗屋彦右衛門佐々木豊前守横道權之允  
小野太郎右衛門新見右衛門分捕仕候城主賀來與二郎をば吉川殿家  
中井下左馬允討取穴戸備前守自身鎧を突伏首を取高名被仕候家中  
の者には末兼土佐守深瀬家來中所太郎左衛門小山手左京いづれも  
組打の高名仕候寺下市佑淺原備後守是又敵を討致高名候中所掃部  
勢一四郎兵衛樽井菅田此外打死の者も數多御座候輝元公御歸陣の  
後黒田官兵衛殿爲上使吉田被差越此度の御陣中御馳走故九州無異  
儀御退治御満足に被思召の旨御禮秀吉公より御意御座候則備前守



儀自身手柄成働き仕候段達上聞候通輝元公へ官兵衛殿被仰候且又於當城諸手へ討取首數一千餘級生捕男女百人有之見ころしのため悉く張付に懸させられ候小早川殿御家來にも手柄の衆數多可有之候へ共舊記無之追て可記落城の後兩川殿は神田松山へ御陣取候黒田殿は高岡の麓へ御陣替候也

香春城被責取事

一高橋居城香春の城を責らるへきに御談合相極り總勢押寄せ取圍み候此城に一の嶽二の嶽三の嶽と申て山嶺三つ有之其内三の嶽を吉川殿御人數を以て可責取の旨隆景被仰渡候元長は元春於小倉御逝去に付彼地に被成御座候藏人經言は御留守御仕置として藝州新庄へ御上り被成候御下知可被成御大將無之に付殊に三の嶽は嶮岨なる山なりいかゝ可有之哉と香川兵部栗屋彦右衛門など存し候に付

御幕下の益田佐波宍道を招き内談仕候處に此衆承り隆景の仰に候へは御理も被申間敷候殊に元長經言御當地に不被成御座候段も御存の儀に候各を初め吉川勢は悉く三の嶽を枕にして討死より外ある間敷と申に付内談相極り夜に入かつきつれて三の嶽へ攻上りて見れば敵共唯今迄居候と覺てかゝり焼捨置て人は壹人も居不申候されども茅深き山なれば伏兵有之へきとて各用心仕候處に案の如く敵六七十人計鐵砲を以て打立候香川兵部家人三宅源之允手負候祖式掃部家來は鐵砲に中り相果候味方よりも鐵砲を揃へ互に打合申候處に香川栗屋二宮古志など聲を揚て突て懸れば敵早速逃散無難三の嶽を乗取申候其後二の嶽の間に土手を築き柵をふり三好新兵衛を置せられ候左候て總勢透間なく取卷其上付城を築き湯佐渡守を被指置候仕寄の番は各替り番にして勤められ候毛利七郎兵衛

元康の御番手の夜中寒風烈しく候に付少々油断仕候處に城中より様體をうかゝひ突て出元康衆を追立候て湯佐渡罷居候付城へ切て懸り候を佐渡守鐵砲を以て打立候へは不叶城中へ引入候を追掛三人討取候其後諸口に仕寄を攻させらるゝに依て城主降參の御詫言申上候に付兩川殿被遂御分別御兩家より御人數被差出城を御受取せ候て高橋儀は下城被仰付候事

大和大納言秀長大坂御出馬之事

一天正十五年二月五日秀吉公爲御先手大和大納言秀長大坂を御出馬有て九州へ御發向候浮田八郎秀家を初め總勢六萬餘人なり同月廿五日豊前國露木原へ御著陣翌廿六日同國秋吉へ御陣を替られ同廿七日豊後湯の嶽へ御陣取候就夫輝元公隆景元長御本陣へ御出候處に早速秀長御相對被成豊前國平均に被治候事偏に各御戰功故なり

と被仰感したまふ角て中國勢三萬餘加はりければ既に總人數十萬餘にて同國府内へ御陣を移され夫より日向の耳川に御陣を居られ候然處に島津中務一萬計の人數を卒し同三月十二日耳川の河邊へ打出此方を招きけれ共御本陣より御下知無之に付河水を渡す者一人もなければ中務も城中へ人數を引入候吉川元長は明日川越の合戰於有之は眞先に可渡と思召候に付千代延與助戀塚三郎兵衛兩人を召て此方などは水練の達者なれば瀬ふみ可仕の旨被仰付候故兩人河水にのそみ瀬踏を仕り淺深の儀委細申上候明れば十三日の朝耳川の邊へ元長備を出したまふ島津も亦城外へ人數を出し招かする此様體秀長御覽候て隆景を呼給ひ吉川殿川を可被渡と見申候間御自分指留可被申の由被仰に付隆景元長の御備場へ御座候て御一戰御無用の通被仰差留られ候其後秀長よりも御使者を以て今日は

川越仕る間敷の通總軍へ下知し給ふなり然處に中務事夜中に城へ火をかけ焼立同國佐渡原の城へ引退く總軍是を見て取ものも不敢取我先にと川を渡し跡を慕ふ處に六七里計有之高城と云城に三原彈正と云者籠り居候に付此城を可被攻とて城の正面は毛利右馬頭輝元公其次小早川隆景其次西の方は吉川治部少輔元長藏人經言東の山には大將羽柴美濃守秀長卿南の方は浮田八郎秀家其外各陣所なり後詰の押へには黒田官兵衛息吉兵衛宮部善乗坊繼潤垣屋播磨守荒木平大夫龜井武藏守南條伯耆守各陣城を築堀をはり壁柵を付て薩摩口に陣を取都合人數十萬餘人幾重ともなく取かこむといへとも城兵臆する體もなくさるに依て敵を侮り卒爾の働仕る間敷候旨御下知に付竹束を付勢樓を組上て攻寄るかゝる處に同十七日の曉島津兵庫頭義弘大軍を引率し宮部善乗坊南條伯耆守陣城へ押來

て攻候宮部南條如御定法弓鐵砲にて打拂ひ鎗長刀にて突伏掛倒しけれ共薩摩勢事ともせず死人を乗越く攻よせ鹿の角を竹に付け手毎に持て塀格子にかけて聲を揚て引崩すされ共能防戰仕に付攻込候事不成内夜明候へは薩摩衆退散する追打に可仕とて諸勢進みける處に追討仕間敷の通秀長より御下知に依て追掛る事不相成候尾藤家來馬上百騎計追掛敵の様體を見るに薩摩勢眞丸に成折敷鐵砲を打て繰引にする尾藤者共此様子を見て頓て引返候其後又薩摩勢取て返し黒田勘解由官兵衛陣城近く來り備を立て見合頓て又引退時道に手負われは首を揚て取歸る此度の迫合に薩摩方打死五百人計有之處に皆已か家名を腕に入墨にして今日討死と書留たり誠に島津勢剛強の意地見えたりとて諸人感し入候其以後は薩摩より後詰も無之諸手よりは仕寄を付よせ稠敷攻候に付城兵力盡て一命

の御詫言申上候へは秀長被聞召御分別にて三原彈正を初め雜人に至る迄御助候て薩摩へ送り捨られ候事

秀吉公九州御進發之事

一天正十四年の冬關白秀吉公より九州可有御進發の旨輝元公小早川隆景吉川元長へ被仰越候就夫御三人御談合の上當年は無餘日候間來春御進發可然の通黒田勘解由安國寺渡邊石見守を以て被仰上候に付舊冬は御進發無之翌天正十五年三月朔日京都を御出馬被成同月十八日長門國赤間關被遊御著陣丸毛三郎兵衛城戸十乗坊門司の城番被仰付翌十九日關門御渡海候て門司に御滯留有て諸事御用等被仰付候黒田勘解由龜井武藏守を普請奉行に被成都喜枝ツキエに新城を築せられ御番勢被籠置其後大軍を被召連候て豊後へ御陣を移され候處に島津中務少輔家久二萬の人數を以て同國府内に城を構へ秀

吉公を防ぎ申候秀吉公も先御遠慮候て遠卷に被仰付其後得と御見合被成急に被取圍候處に家久難叶存候哉風雨烈しき夜に紛れ城を明て退散仕候に付則城を取て大友宗麟息義統父子を置たまひ夫より長野三郎左衛門居城馬か嶽へ御本陣を被替丹波少將秀勝を大將にて蒲生飛驒守氏卿前田肥前守利長谷大膳小野木縫殿助を被相添豊筑の堺熊見越中守籠居候岩石の城を一刻攻に御乗取せ被成候各手柄被仕候に付増田右衛門尉を御使者にて御感狀を被下候秋月種長は小熊の城に罷居候處に岩石落城を聞て急ぎ城を明け山中に隠居し御詫言申上候へは秀吉公被聞召被遊御分別舊領を無相違拜領し小熊に歸り薩州への御先手仕候龍藏寺政家は輝元公へ使著を以て向後は秀吉公御幕下に屬し御奉公可申上の旨宜様に御取成奉仰の通被申越に付其段輝元公より仰上られ候へは秀吉公被遊御分別